山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第173集

甲斐風土器の丘・曽根丘陵公園

うえのだいら

上の平遺跡第7次発掘調査報告書

1999.10

山梨県教育委員会

序

この報告書は、「甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園」整備事業に伴い、1998年度に発掘調査した山梨県東八代郡中道町上の平遺跡について、その成果をまとめたものです。

上の平遺跡は既に1979～1993年の間に6次にわたる調査が行われ縄文時代の住居跡38軒・土坑190基、弥生時代の住居跡19軒・方形周溝墓125基、平安時代の住居跡3軒などが見つかっています。今回の調査区は公園の外周道路部分を中心とした第6次調査区の西隣にあたり、縄文時代の住居跡１軒・土坑11基、弥生時代末～古墳時代初頭にかけての方形周溝墓2基（ただし新たな発見はなし）・土坑3基の調査を行ないました。調査区総面積が200m²足らずという狭い調査面積にも関わらず、このように多くの遺構が発見され、また方形周溝墓のうちの１基からはほぼ完形の壷が出土し、古墳時代後期という今までの調査では発見されなかった時期の甕が土坑から出土しています。また、方形周溝墓群の影に消されがちな縄文時代についても過去の調査において、中期初頭を中心とする大規模で特殊な遺物をもつ集落であったことがわかっており、今回の調査でもその数は少ないものの炉を閉じるというある意味で特殊な出土状況をみせる住居跡の発見、土偶・土製玦状耳飾などの特殊遺物の出土など従来の調査と歩調を合わせるような成果が得られています。

また、今回の報告書では新たな試みとして、この報告を専門の研究者向けではなく一般の人々むけに発信しよう、というコンセプトをもって作成してきました。発掘調査によって得られた新しい知見は、研究を推し進める専門家にもたらされることは当然ですが、その遺跡を育んだ土地に住む人たちに一番先に還元されるべきものなのではないでしょうか？　一人でも多くの人たちに発掘調査によってわかった事柄や調査中に感じられるワクワクを共感して欲しい、考古学の面白さを知って欲しいという思いをこの報告書に託しました。どんな小さな事柄からも考えようによっては様々なことが見えてきます。そんな小さな発見をお伝えします。この報告書を読み終わったとき、ほんの少しでも古い時代に興味が湧いて頂ければ幸いです。

なお、末筆ながら本調査にご協力いただいた方々並びに各機関に厚く御礼申し上げます。

1999年10月

山梨県埋蔵文化財センター
所　長　　大塚 初重

目　次

第1章　上の平遺跡とその調査・・・・・・・・・・1
　第1節　調査経過　・・・・・・・・・・・1
　第2節　調査組織　・・・・・・・・・・・1
　第3節　上の平遺跡と周辺の環境・・・・・・・1

第2章　発掘調査の前に…　・・・・・・・・・・3
　第1節　どうやって調査するのか？・・・・・・3
　第2節　基本層序　・・・・・・・・・・・3

第3章　発掘調査でわかったこと・・・・・・・・5
　第1節　旧石器時代の遺物・・・・・・・・・・5
　第2節　縄文時代の遺構と遺物・・・・・・・・6
　　1. 住居跡／2. 集石土坑／3. 土坑
　第3節　弥生時代・古墳時代の遺構と遺物・・15
　　1. 方形周溝墓／2. 土坑
　第4節　その他の遺構　・・・・・・・・・・18
　第5節　遺構以外から出土した遺物・・・・・19

第4章　自然科学分析　・・・・・・・・・・22
　第1節　第1号集石土坑の自然科学調査・・・・22
　第2節　断層とその層位　・・・・・・・・・・25

第5章　まとめ　・・・・・・・・・・26

写真図版　・・・・・・・・・27～

挿図目次

第1図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・2
第2図　基本層序　・・・・・・・・・・・・3
第3図　上の平遺跡全測図・・・・・・・・・・・4
第4図　第7次調査区全体図・・・・・・・・・・5
第5図　第1号住居跡平面図・・・・・・・・・・7
　エレベーション・炉セクション
第6図　第1号住居跡出土土器・・・・・・・・・8
第7図　第1号集石土坑平面図・・・・・・・・・9
　石器出土状況・エレベーション
第8図　第1号集石土坑完掘状況・・・・・・・10
　セクション・出土土器
第9図　第1号集石土坑 出土石器1・・・・・・11
第10図　第1号集石土坑 出土石器2・・・・・・12
第11図　第4号土坑平面図・セクション・・・・14
　エレベーション・出土遺物
第12図　第77号方形周溝墓 出土土器・・・・・15
第13図　第77・78号方形周溝墓・・・・・・・・16
　セクション・遺物出土状況
第14図　第3号土坑遺物出土状況・・・・・・・17
　セクション・出土土器
第15図　断層の位置・方向・セクション・・・・・18
第16図　遺構外出土遺物1（石鏃）・・・・・・19
第17図　遺構外出土遺物2・・・・・・・・・・20
　（土製品・鉄製品・土器）
第18図　遺構外出土遺物3（石器）・・・・・・21

例言

1. 本報告書は、平成10年度の甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園整備事業に伴って発掘調査された、山梨県東八代郡中道町上の平遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品の整理は山梨県埋蔵文化財センターが行ない、同機関主任文化財主事熊谷栄二・文化財主事野代恵子(旧姓市川)が担当した。
3. 本報告書は編集・執筆ともに野代恵子が行なった。自然科学分析について委託した部分については、執筆者を文頭に示した。
4. 写真撮影は現場においての遺構などは熊谷栄二・市川恵子、遺物は小川忠博が行なった。
5. 遺物実測・トレースは中込星子・佐々木富士子・石原恵が行なった。イラストは大塚敦子による。
6. 発掘調査から報告書作成にあたっては、下記の方々からご教示・ご協力をいただいた。厚く感謝申し上げます。（敬称略）

河西　学、林部　光、小川忠博、大塚敦子、池谷建材、東雲測量、

凡例

1. 遺構・遺物の挿図の縮尺は原則として以下の通りである。
　遺構　全測図1/3000、調査区全体図1/1200、住居跡・集石土坑1/40、土坑1/20
　遺物　縄文土器実測図1/6、土器拓影1/3、土偶・土製品1/2、石器1/3、1/6
2. 遺構平面図・断面図において網かけ部分は焼土及び炉の範囲を示す。

第１章　上の平遺跡とその調査

第１節　調査経過

風土記の丘整備事業の一環としての有価物分別施設の設置に伴って、現農道下の南北約20m、東西約23mにわたる三角形の部分、およそ200m²について調査を実施しました。期間は1998年4月20日～6月29日にかけて行なっています。

第2節　調査組織

調査主体	山梨県教育委員会	教　育　長	輿石和雄
調査機関	山梨県埋蔵文化財センター	所　　長	大塚初重
		次　　長	藤田 修
		埋蔵文化財指導幹	田代 孝
調査担当	山梨県埋蔵文化財センター	主任・文化財主事	熊谷栄二
		文化財主事	市川恵子

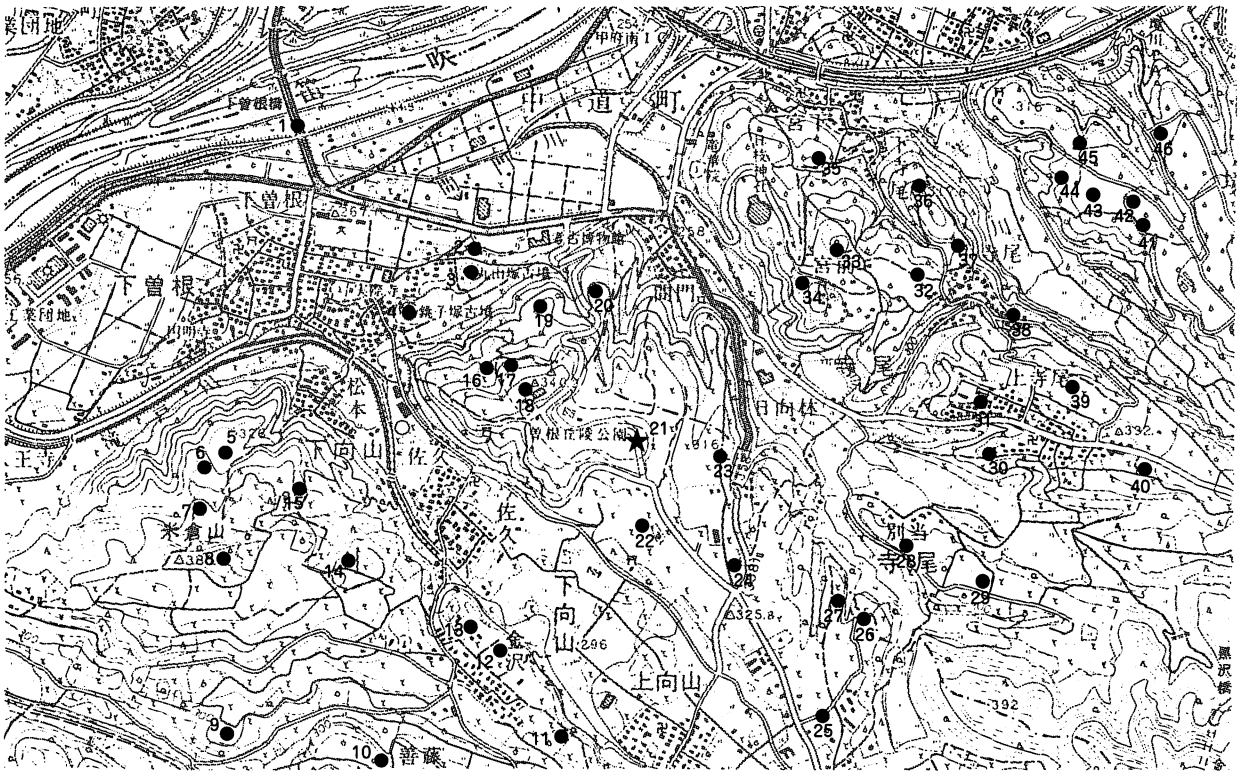
作 業 員　石原恵、猪股順子、今沢美代、笠井真由美、栗原礼子、佐々木富士子、田辺秋太郎、土橋園子、村田美由紀

第3節　上の平遺跡と周辺の環境

上の平遺跡は、甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園の中にあります。この遺跡は過去6度にわたって調査されてきました。1次から3次までの調査は1979～81年にかけて行なわれ、この一帯の大規模な方形周溝墓群の内容が明らかとなりました。4・5次調査は1985～86年にわたって行なわれ、この方形周溝墓群がより大規模なものであることと、この一帯は縄文時代においても人々が家を作って長期にわたって住むような場所であったことがわかっています。続く6次調査は1993年に行なわれ、この丘陵上における縄文時代の集落の面的な広がりや、方形周溝墓群が丘陵のはずれにまで広がっていることがはっきりとしました。今回の７次調査は位置的にはこの6次調査の西隣にあたり、地形的には緩やかな斜面部となっています。ここからは一体どんなことがわかったのでしょうか？これについては第3章でお話ししましょう。

さて、上の平遺跡のまわりに目を移すとこの辺りにはたくさんの遺跡があることがわかります(第1図)。これらの遺跡がのっている曽根丘陵は甲府盆地の南東に接しており、南北3km、東西13kmにわたって広がっています。この丘陵は地殻変動によって御坂山地のほうからせり出してきた地面が甲府盆地によって行く先を遮られ、一部は盆地の下にもぐり込んだものの行き場を失った地面が盛り上がり、たるんだことによってできあがっている地形です。言葉を換えれば地面に働いた大きな力がはきだされている場所であると言えるでしょう。こんなことから、慢性的なものではないにせよ地層のズレ(断層)やゆがみ、地すべりの起こりやすい所となっているのです。上の平遺跡からもこの大地の大きな力を感じられる痕跡がみつかっています。これについては第3章ー第4節で詳しく説明することにします。

このようにしてできた曽根丘陵は、特に御坂山地に接する側では平坦面を残す台地となり、



1	下曽根橋下遺跡	11	下向山遺跡	21	上の平遺跡	31	白戸遺跡	41	下原南遺跡
2	かんかん塚（茶塚）	12	金沢天神遺跡	22	宮の上遺跡	32	天神遺跡	42	狐塚古墳
3	丸山塚古墳	13	天神山古墳	23	熊久保遺跡	33	物見塚古墳	43	下原遺跡
4	銚子塚古墳	14	米倉山Ｂ遺跡	24	立石遺跡	34	宮の前遺跡	44	飯潰塚2号墳
5	女沢Ａ遺跡	15	小平沢古墳	25	諏訪前南遺跡	35	天神山塚古墳	45	天神下遺跡
6	女沢Ｂ遺跡	16	鍋弦塚古墳	26	諏訪前北遺跡	36	北の山北遺跡	46	御所山南遺跡
7	女沢Ｃ遺跡	17	稲荷塚古墳	27	別所遺跡	37	北の山南遺跡		
8	米倉山Ａ葛浦池遺跡	18	東山南遺跡	28	馬場遺跡	38	経塚（長寿尾経塚）		
9	清水遺跡	19	大丸山古墳	29	前附遺跡	39	北原遺跡		
10	西原遺跡	20	東山北遺跡	30	坂下遺跡	40	上原西遺跡		

第1図　　周辺遺跡分布図

日当たりも水はけも良いという、人々が好んで集まり暮らし易い地形となっています。このためこの一帯には多くの遺跡が存在するのです。山梨県ではまだ報告の少ない旧石器時代の遺跡もみられますし(上の平・宮の前・立石・下向山・小平沢遺跡など)、縄文時代では特に中期初頭の遺跡が集中しています(上の平・下向山・立石遺跡など)。また弥生時代後期から古墳時代前期では125基の方形周溝墓群がみつかった上の平遺跡や、長軸36m、短軸31.4mという国内最大規模の方形周溝墓がみつかった東山北遺跡(古墳時代前期)の他、丸山塚古墳、銚子塚古墳、大丸山古墳、小平沢古墳などの前方後円墳も多く集中する地域となっています。

参考文献

1987 山梨県教育委員会「上の平遺跡第４次・第5次発掘調査報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第29集

1991 山梨教育委員会「上の平遺跡第1・2・3次調査」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第59集

1994 山梨県教育委員会「上の平遺跡第6次調査・東山北遺跡第４次調査・銚子塚南東部試掘」山梨県山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第94集

第2章　発掘調査の前に・・・

第1節　どうやって調査するのか?

第7次調査の調査区は第6次調査区の西隣にあたり、調査面積は約200m²です。調査区内に5mグリッドを設定していますが、これは公園内に設置されている測量基準点〔基９〕から国土座標を測量して、Ｂ－4グリッドの北西隅杭がＸ＝－45965.000m、Ｙ＝8125.000mとなるように設定しています。この国土座標は日本の国土を南北、東西方向にサイの目状に区切ったものでこの座標上にグリッドを設定しておけば日本の中のどの場所にその遺跡があるのか、すぐ地図上に落せるようになります。このグリッド杭に基づいて調査を行ないました。

第2節　基本層序

基本層序とは土層の基本的な堆積状況のことです。上の平遺跡の層序を次に示してあります。今回の調査区は緩やかな斜面部にあたりますが、層序的には変化のないほぼ平坦な地層を示しています。

第Ⅰ層：耕作土

第Ⅱ層：暗黄褐色土層…Ⅲ層下の黄褐色土層と比べてやや軟質。

第Ⅲ層：黒褐色土層…この層の直上付近には火山ガラス濃集層(ＡＴ)があり、立川ローム層第Ⅱ暗色帯(約2万年前相当)にあたる。

第Ⅳ層：黄褐色土層…Ⅳ層下の黄褐色土に比べて粘性・しまりが弱い。

第Ⅴ層：黄褐色土層…ブロック状に剥離するやや軟質のローム層。

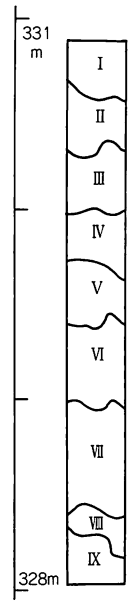
第Ⅵ層：黄褐色土層…赤色スコリヤを多く含む軟質のローム層。

第Ⅶ層：黄褐色土層…１㎜大の白色粒子を多く含む。

第Ⅷ層：黄褐色土層…赤色、青色スコリヤを若干含む。

第Ⅸ層：灰褐色粘質土層

第Ⅹ層：橙褐色軽石層…Ｐｍ-Ⅰ(約８万年前相当)。



第2図基本層序

ちょっとひとやすみ・・・

すこし難しい言葉がでてきたので整理してみましょう。

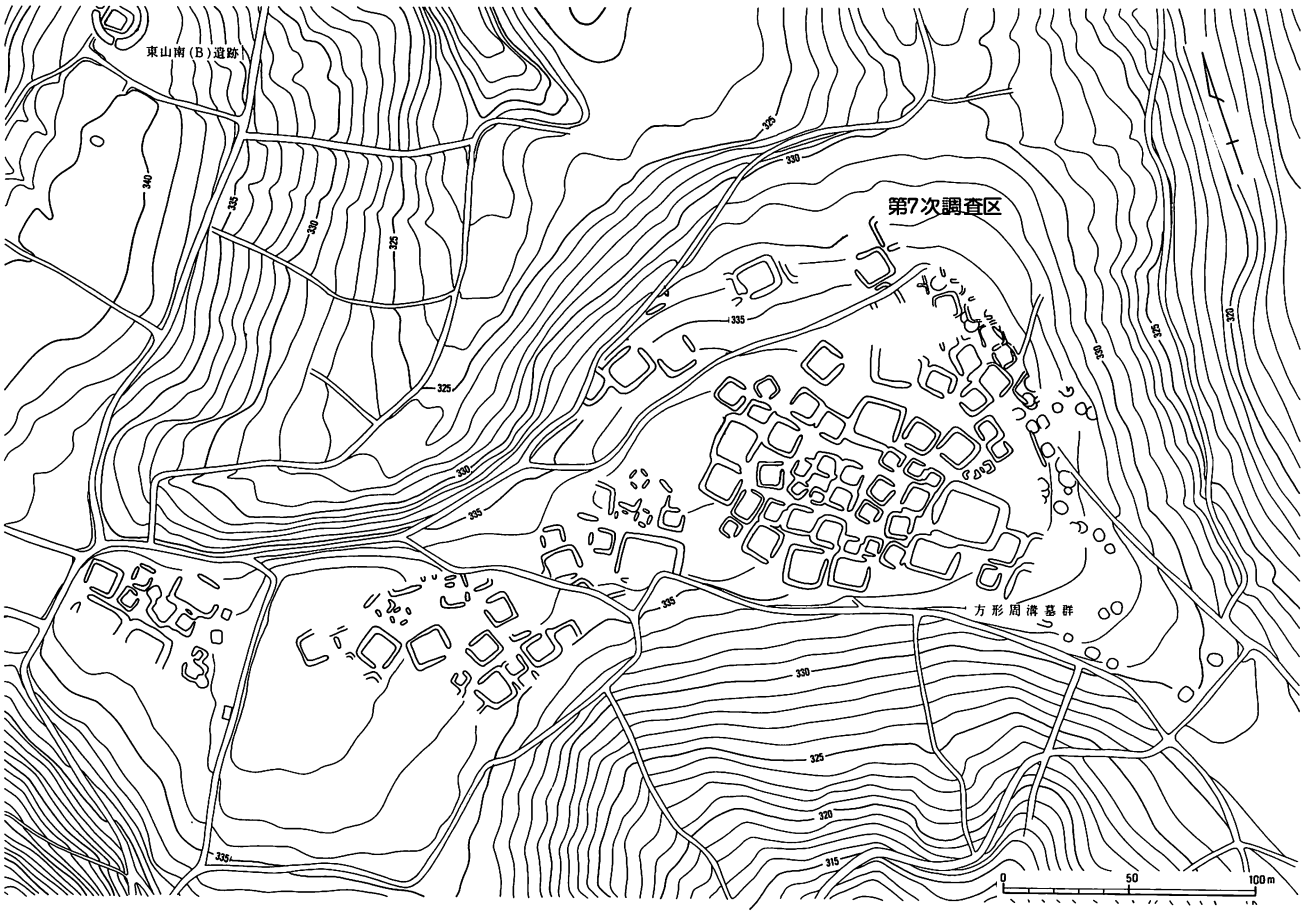
Ａ　Ｔ…姶良丹沢(**あ**いら**た**んざわ)火山灰の略で、鹿児島県の桜島の隣にあった火山です。この火山灰は一定期間のうちに日本列島の全域と周辺大陸の一部にかけて降灰したことからこの火山灰の積もったあとがみつかれば、その位置がだいたい同じ年代を示すと考えられます。年代的には約2万2000年前～2万5000年前だと言われています。全国的に離れた場所でも、この火山灰を手がかりにしてその層の時期を決められるのです。(第4章で第7次調査のＡＴの分析について載せてあります。)

ローム層…火山灰が降り積もってできた層です。これは聞いたことがある人が多いかもしれませんね。

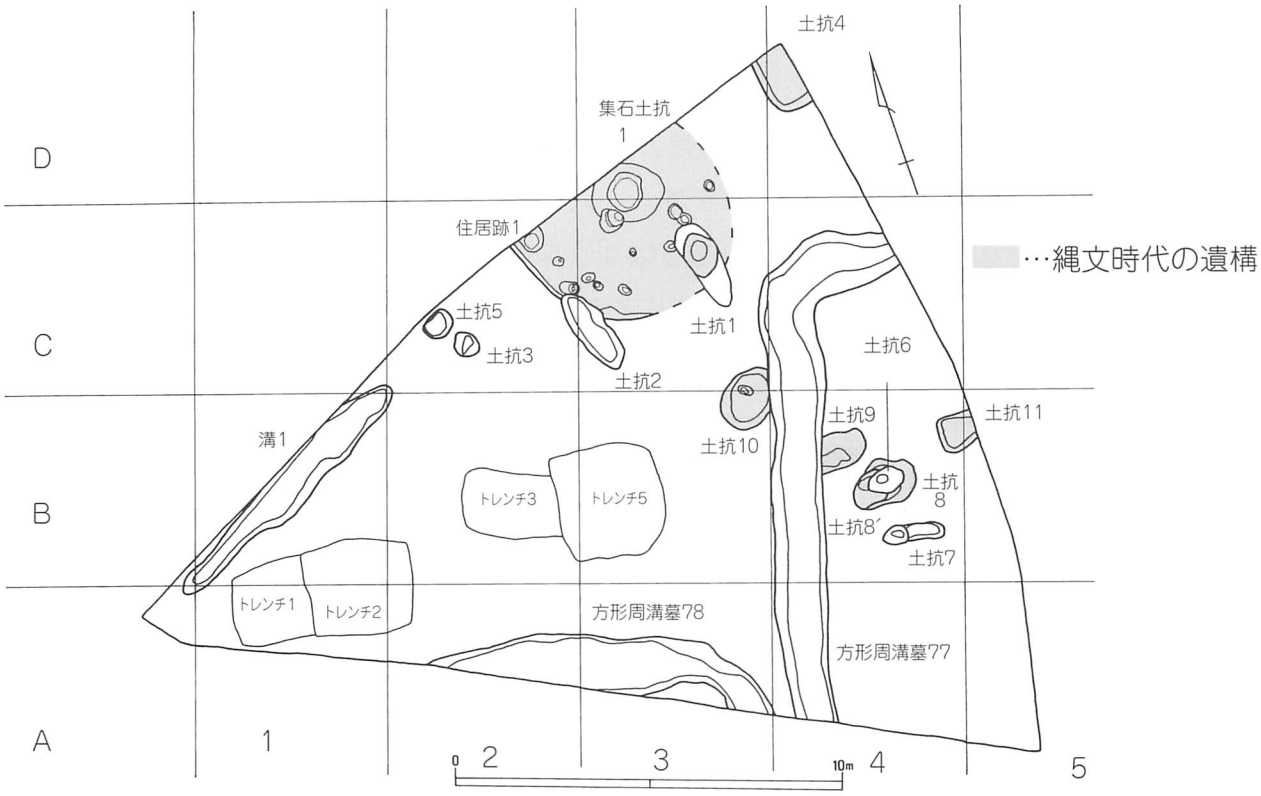
Pm-Ⅰ…長野県の御嶽山が噴火したときに降った軽石粒でこれがみられるとこの層が約8万年前にあたることがわかります。

このようにして一時的に広い範囲にわたって降った火山灰が土層中にパックされていれば、その年代がわかってしまうのです。それにしても姶良丹沢火山灰のように日本列島にわたって降灰するような噴火はとてつもないものだったのでしょうね。

さて、この層序のうち方形周溝墓や住居跡のような‘遺構’が確認されるのは第Ⅱ層の上面で、基本的にこの層を遺構確認面としました。この確認面では弥生時代末から古墳時代初頭および縄文時代の遺構がほぼ同じ高さでみつかっていまが、調査区は北に向かって緩い傾斜となっており、調査区北側にいくに従って遺構面に若干の高さの違いがありました。これはこの傾斜に従って上から土が少しずつ流れたためと考えられます。この層の中からも縄文時代の土器片などがみつかっています。



第3図　　上の平遺跡跡　全測図



第4図　　第7次調査区全体図

第３章　発掘調査でわかったこと

第１節　旧石器時代の遺物

‘旧石器時代’という時代の名前を聞いたことがあるでしょうか？　山梨県ではまだあまり調査の知られていない時代ですが、最近の調査では高速道路の八ヶ岳パーキングをつくる際の発掘調査で見つかっています（米山遺跡）。旧石器時代は縄文時代よりも前の時代で、人々はまだ土器を作ることを知らず、生活のための道具は専ら石だったという時代です。

上の平遺跡の周辺でも宮の前遺跡・立石遺跡などが、旧石器時代の遺跡として知られています。この一帯では、層の直上にＡＴがある第Ⅲ層黒褐色土層（3ページ参照）のなかに、旧石器時代の人々が生活していた地面が残されています。今回の調査区内にはこの第３層が残っている部分があったので、「もしかしたら、旧石器時代の人々のくらしの痕跡が見つかるかも知れない。」という期待をもって調査を進めました。この時代は大きな土器、きれいな土器がゴロゴロという訳にはいきませんから、調査スタッフも薄く地面を削っていくという地道な調査が続きました。「カチッ！」という音とともに発見されたのは黒耀石のかけら2点でしたが、この第Ⅲ層の中から出土したということで旧石器時代にこのあたりにも人がいたということがわかりました。

黒耀石のかけらでなぜ、人がいたということがわかるの？

黒耀石はどこにでも転がっている訳ではありません。山梨県あたりで石器に使われている黒耀石には、長野県の和田峠や静岡県の柏峠(伊豆半島東岸で箱根に近い所)や東京都の神津島で採取されたものが多く見られます。…ということは、上の平遺跡でも誰かが持ってこなければ、その場所には黒耀石があるはずはないのです。ここで見つかった黒耀石のかけらは、石を打ち欠いて石器を作るときにでたゴミで‘剥片’(はくへん)と呼ばれるものです。こんな小さなかけらからもわかることがあるんですね。

第2節　縄文時代の遺構と遺物

1. 住居跡

第１号住居跡（第5図、写真図版2）

位　　置　C・D－2，3グリッド。第1号集石土坑を切り、第1・2号土坑に切られている。

形状・規模　不整円形？　(推定径)5.6m。

床　・　壁　床面は不明瞭。壁も床面近くまで削平されているため詳細不明。

炉　埋甕炉（第5図）。堀込み規模は40×45cm、深さ25cm。炉体土器は原形をとどめず、一度抜き取ってから重ねて置いた状態で検出された。内面は火を受け脆弱となっている。時期は曽利Ⅲ式期。

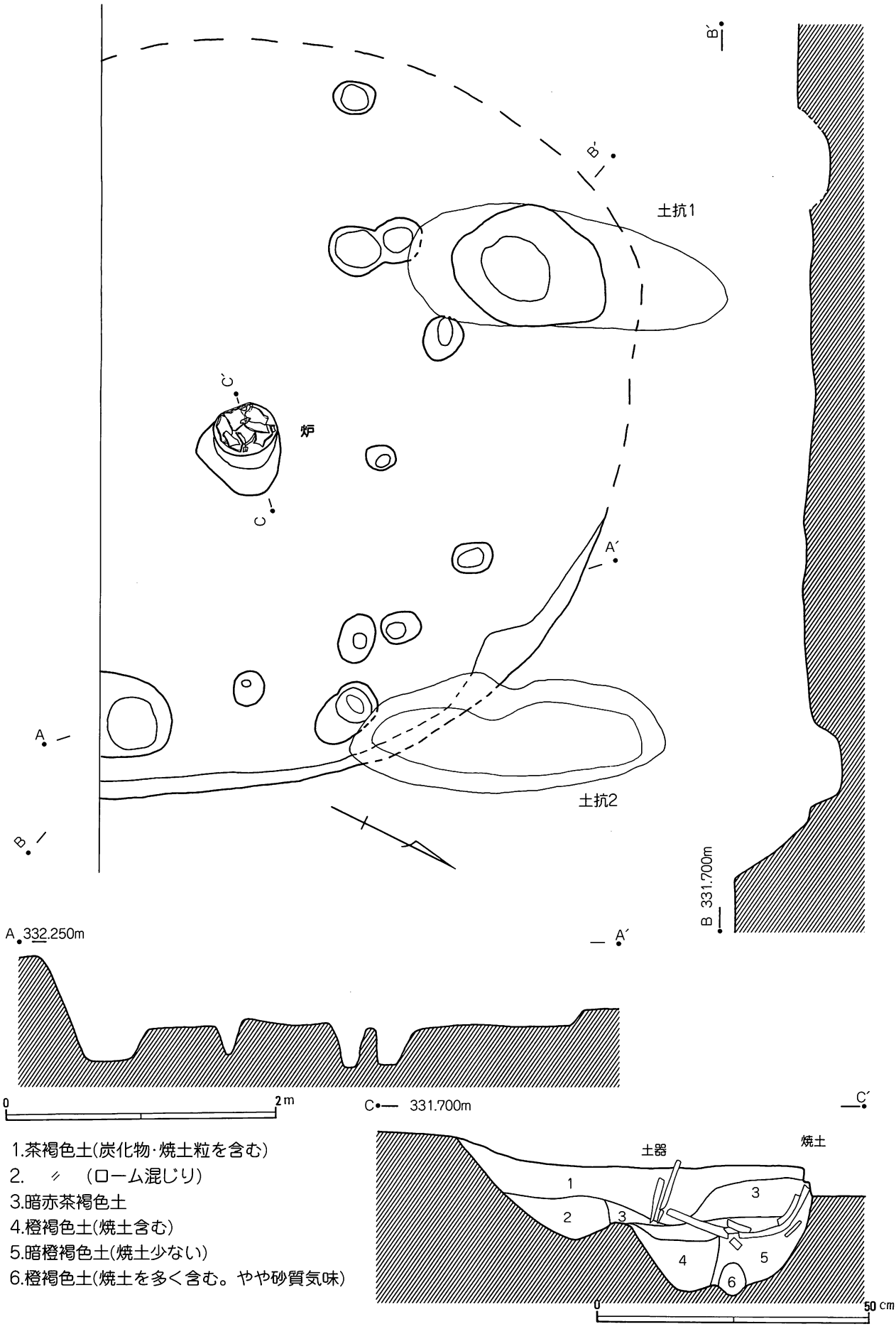
その他施設　やや大きめのピットが1基、小ピットが10基ほど、土坑が１基発見された。ピットは最も深いもので30cm程度であった。

出 土 遺 物（第6図、写真図版3）

1、2ともに曽利Ⅲ式土器で、内面が脆弱となっているため炉に使われたものと考えられる。モチーフ的にはよく似ているのだが、胎土が異なることから別個体である。1は1～2mm程度の長石をやや多く含む。2は5mm大程度の長石を含む。

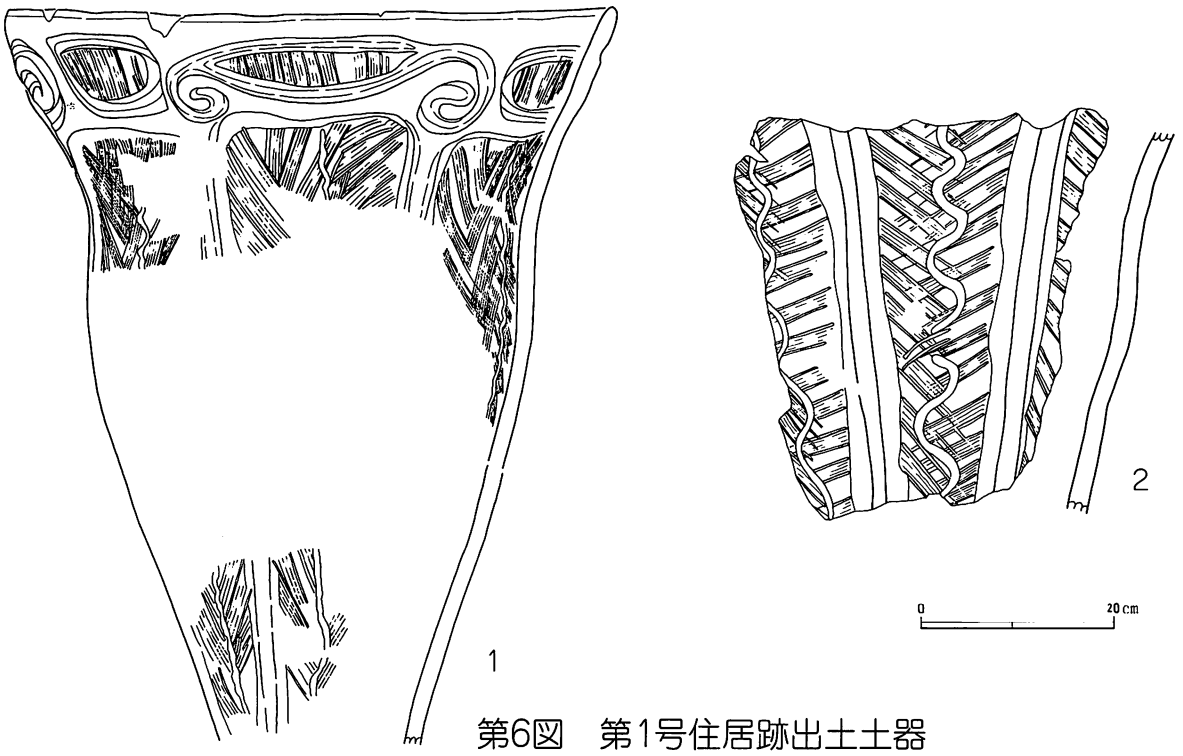
どうして炉は壊されているんだろう？

今回の調査ではこれが唯一の住居跡です。この住居の炉に使われている土器は曽利Ⅲ式とよばれているものなのでこの住居跡は今から約4,000年前(中期後半)のものと考えられます。この住居跡の炉はバラバラにされ、その一片一片が重ね合わせられていました。普通、発見される住居跡は住居内の炉体土器もそのままの姿で残されていることが一般的ですが中にはこのように意図的に壊された状態でみつかるものもあるようです。これは炉を閉じるための何らかの儀式を行なったあとだと考えられます。‘火’は闇夜を照らすもの、暖をとるもの、煮炊きに使うもの。縄文人の火に対するおもいは、現代人とはかけ離れたものがあったのでしょう。



1.茶褐色土(炭化物･焼土粒を含む)
2.　〃　(ローム混じり)
3.暗赤茶褐色土
4.橙褐色土(焼土含む)
5.暗橙褐色土(焼土少ない)
6.橙褐色土(焼土を多く含む。やや砂質気味)

第5図　第1号住居跡平面図・エレベーション・炉セクション



第6図　第1号住居跡出土土器

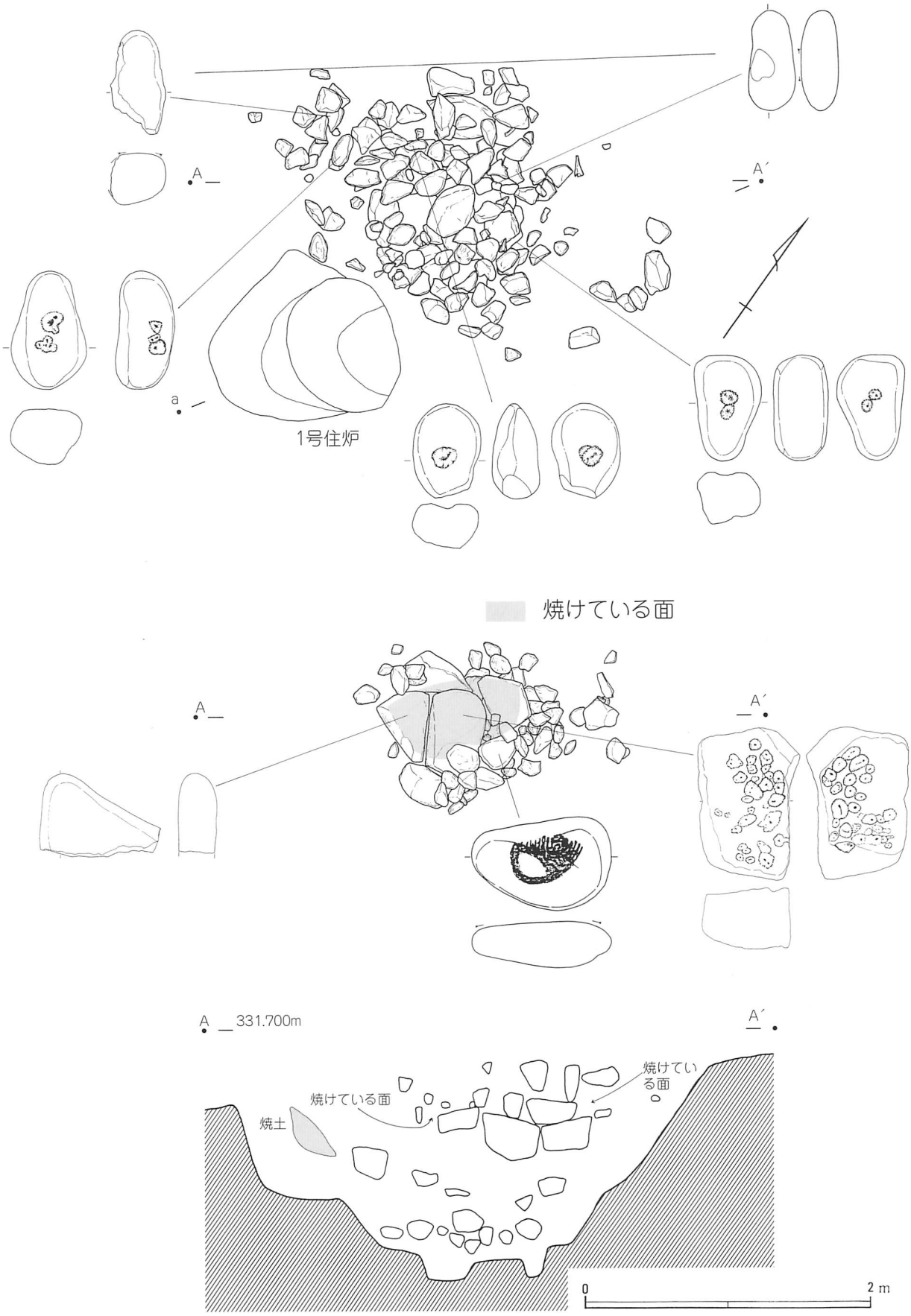
こんなふうに
炉を閉じた
のでしょうか…

2. 集石土坑

第１号集石土坑（第7・8図、写真図版2）

位　　置　C・D－3グリッド。第1号住居跡に切られる。

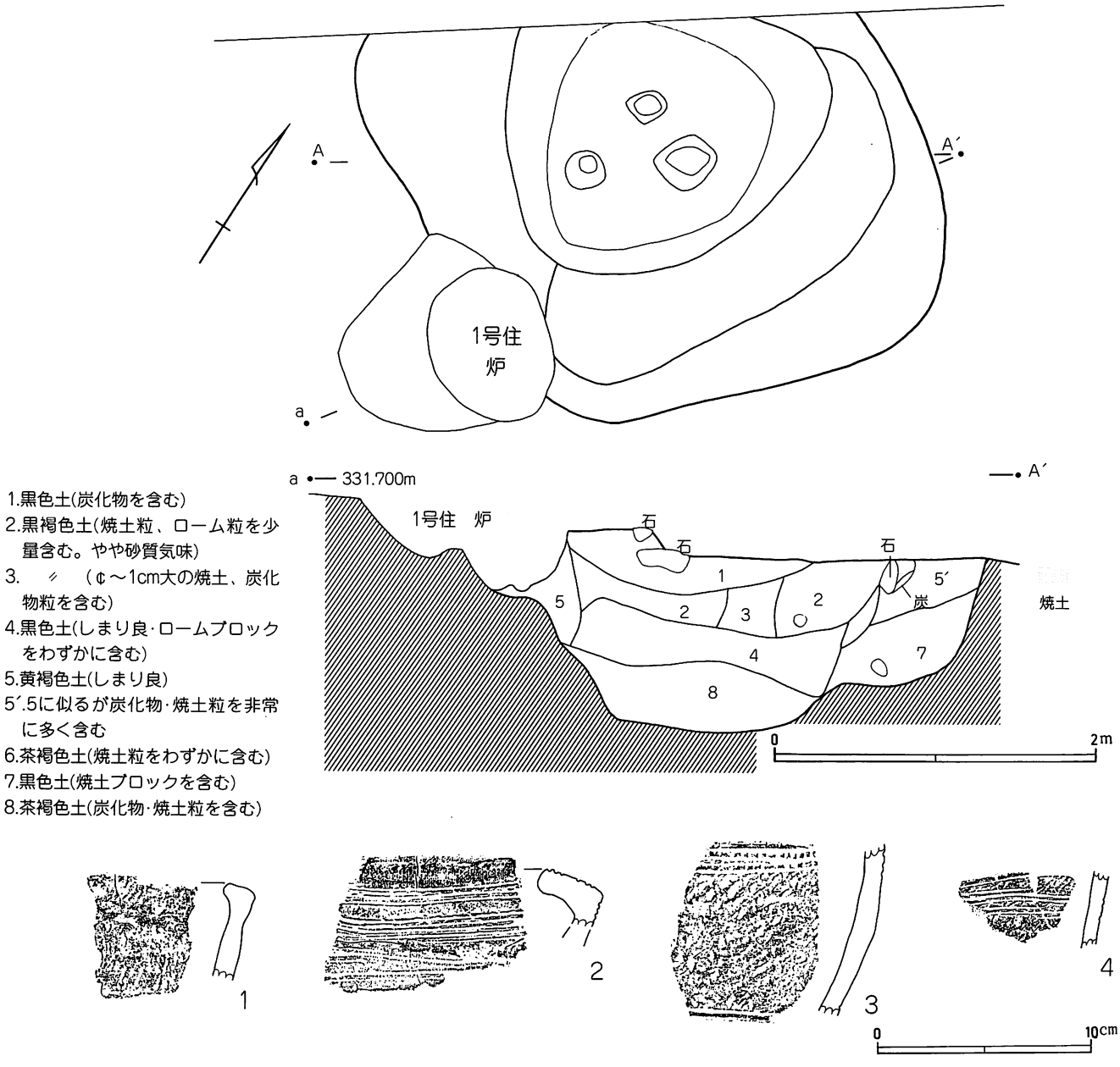
形状・規模　平面は楕円形、断面は逆台形。南側に若干のテラスをつくる。底面に3つのピットあり。長軸1.46m、短軸1.1(+α)mを測る。上から約20～30cmの位置には大きく平らな礫が敷かれ、この礫の上面は著しく焼け、黒化している。土坑内の礫にも火を受けたものが多い。土坑自体には焼けた痕跡はない。



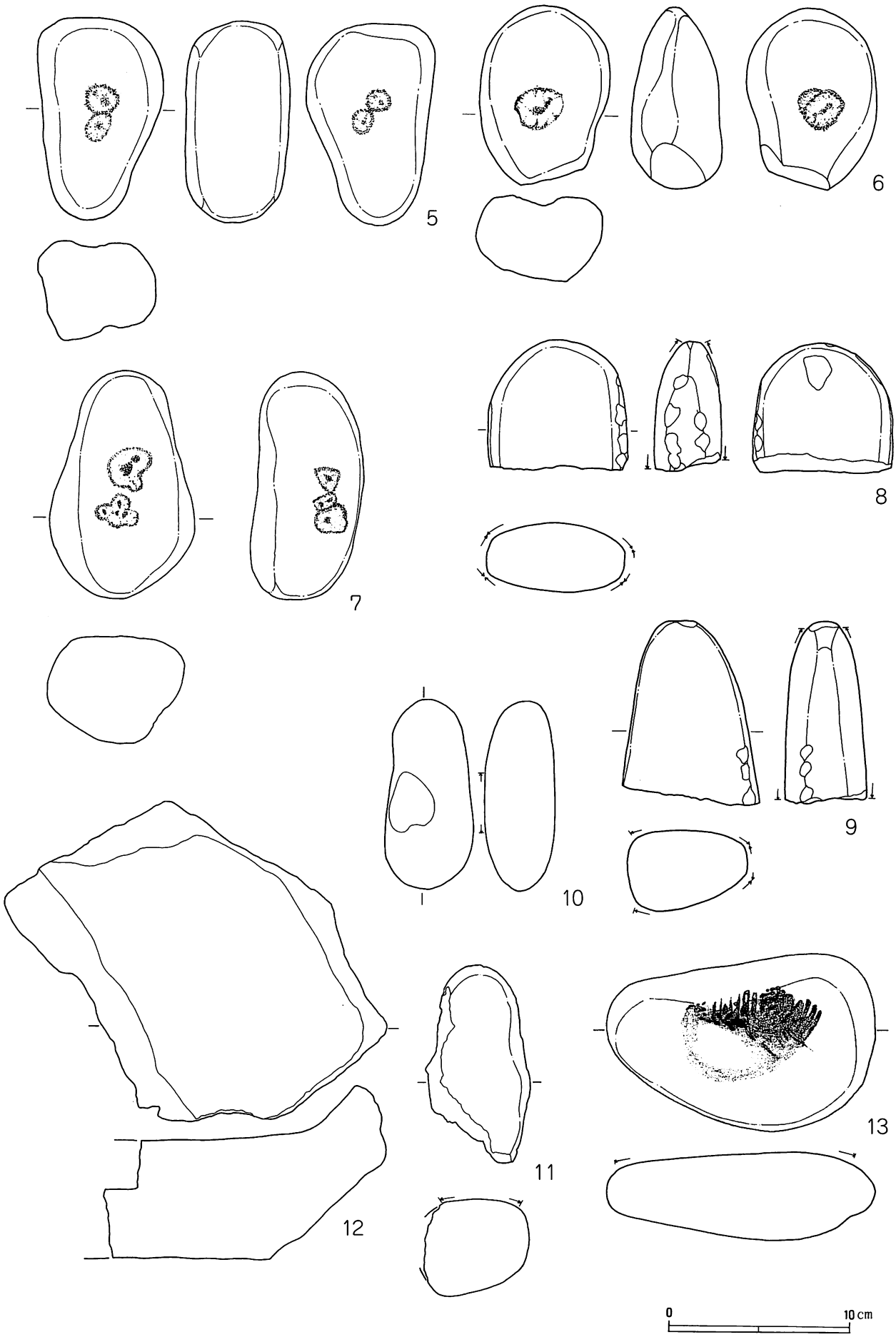
第7図　第1号集石土坑　石器出土状況・エレベーション

出 土 遺 物（第8～10図、写真図版3）

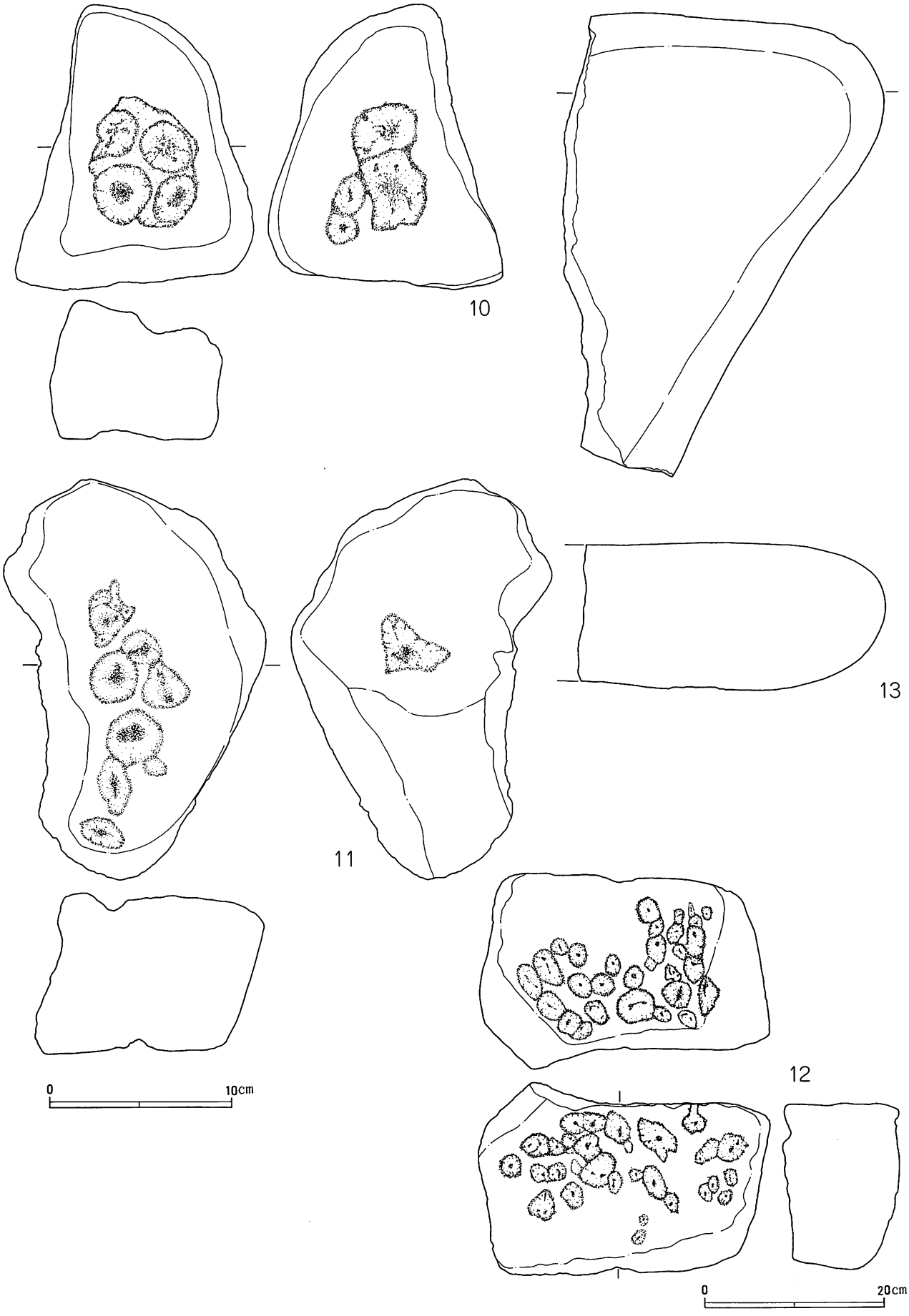
1～4は諸磯ｂ式土器である。地文に粗い縄文を施し、沈線文をもつものが主体で諸磯ｂ式のうちでも新しい段階に位置づけられる。5～7は凹石、8・9は磨石、12は石皿である。10・11・13には擦痕がみられる。13には円を描くような擦痕がみられるが、その上に炭状のものが、幾筋かの線状に付着している。10～12は多孔石である。12・13には煤状のものが付着している。この他、覆土からは多くの焼土・炭化物が出土した。分析によると(第4章ー第1節参照)、炭化物の中にはクリ材・クルミ材が含まれていた。



第8図　第1号集石土坑　平面図・セクション・出土土器



第9図　第1号集石土坑　出土石器1



第10図　第1号集石土坑　出土石器2

この石の入った穴は何に使ったの？

この穴から出土している土器は少ないですが、諸磯ｂ式と呼ばれるものです。今から5,500年くらい前ー縄文時代前期後半にあたります。この穴の中には拳大のものからひと抱えもある大きなものまで、たくさんの石が入れられていました。穴の上から20～30cmくらいのところには平たくて大きな石が敷かれ、その上はひどく焼けて黒く変色していました。バーベキューのような石焼料理をした跡とも考えられますが、穴の中の土が炭だらけではないこと、ここに入れられた石のなかには、**凹石（くぼみいし）**、**磨石（すりいし）**、**敲石（たたきいし）**と呼ばれる、木の実などの殻を割ったりすりつぶしたりするための道具も多く含まれていることから、もっと非実用的な施設であったと考えられます。例えば埋葬施設だと考えれば、この穴に遺体をおさめた後、その上を平たい石でふさぎ、火をともなったおまつりが行なわれたのかも知れません。もしこれがお墓だったとすると、そのまま遺体を入れるには小さ過ぎること、焼けた石・焼けた土・炭化物が含まれていること、穴自体は焼けていないことなどから、遺体はどこか別の場所で一緒に入れられている石とともに焼かれ、この穴に埋葬されたものと考えられます。ちなみに炭化物の中にはクリ材、クルミ材が含まれていました。このように考えていくとなんだか現場検証をしているみたいですね。縄文時代前期後半には、お墓として使われたと考えられるやや大きめサイズの土坑が割合多くみられ、この第1号集石土坑もその流れの中で捉えるのが自然なのかも知れません。

3. 土坑

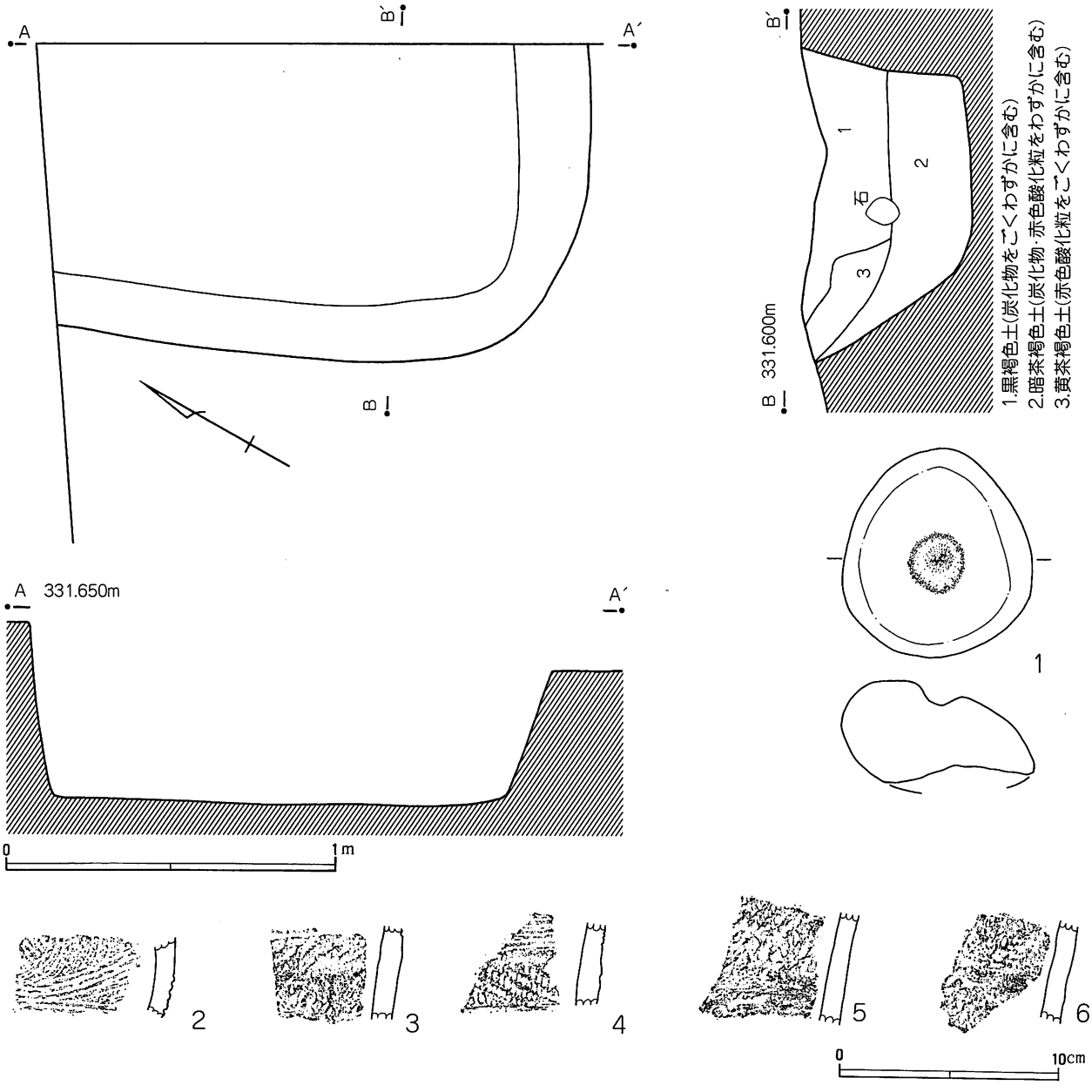
第4号土坑（第11図）

位　　置　D－3・4グリッド

形状・規模　調査区範囲外におよんでいるが形状は不正楕円形を示すものと考えられる。底面はほぼ平坦。深さは約50cmである。

出土遺物（第11図）

1は凹石で、凹みのある反対側の面は欠損し磨滅している。覆土の第1層の最下部から出土している。2～6は、いずれも地文に粗い縄文を施し、2・3・4には沈線がみられる。これらは諸磯ｂ式の新段階に位置づけられる。



第11図　第4号土坑平面図・セクション・エレベーション・出土遺物

第3節　弥生時代・古墳時代の遺構と遺物

1. 方形周溝墓

今回の調査では2基の方形周溝墓を発見しましたが、過去の調査成果と照らし合わせてみると、これはすでに確認されているものであることがわかったので、その通算番号で記載を進めていくことにします。周溝から出土する土器は、ほとんどが縄文土器の破片でした。

第77号方形周溝墓（第13図、写真図版2）

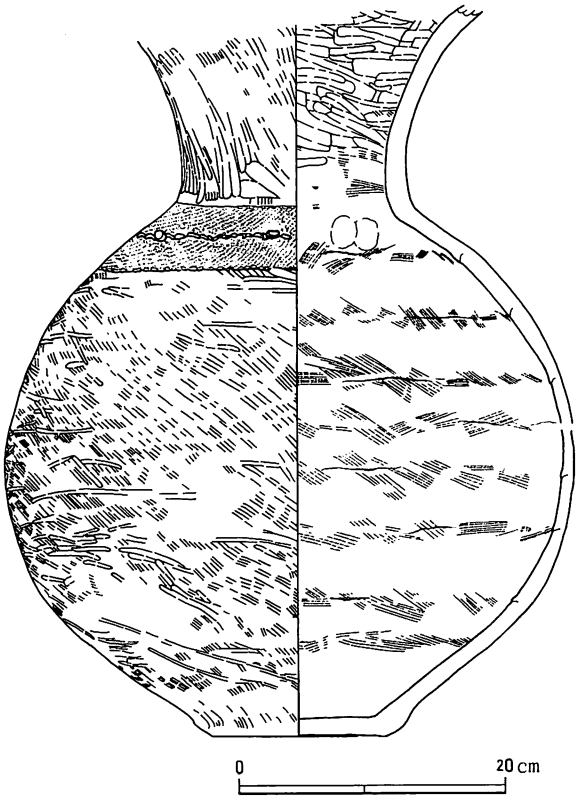
位　　置　A・B・C－4グリッド。調査区の関係上、西辺溝のみを調査。

形状・規模　西辺溝幅1.56m。溝の深さ25～65cm。調査区外におよぶため全体を把握することはできない。現存する北西コーナーはブリッジをもたない。

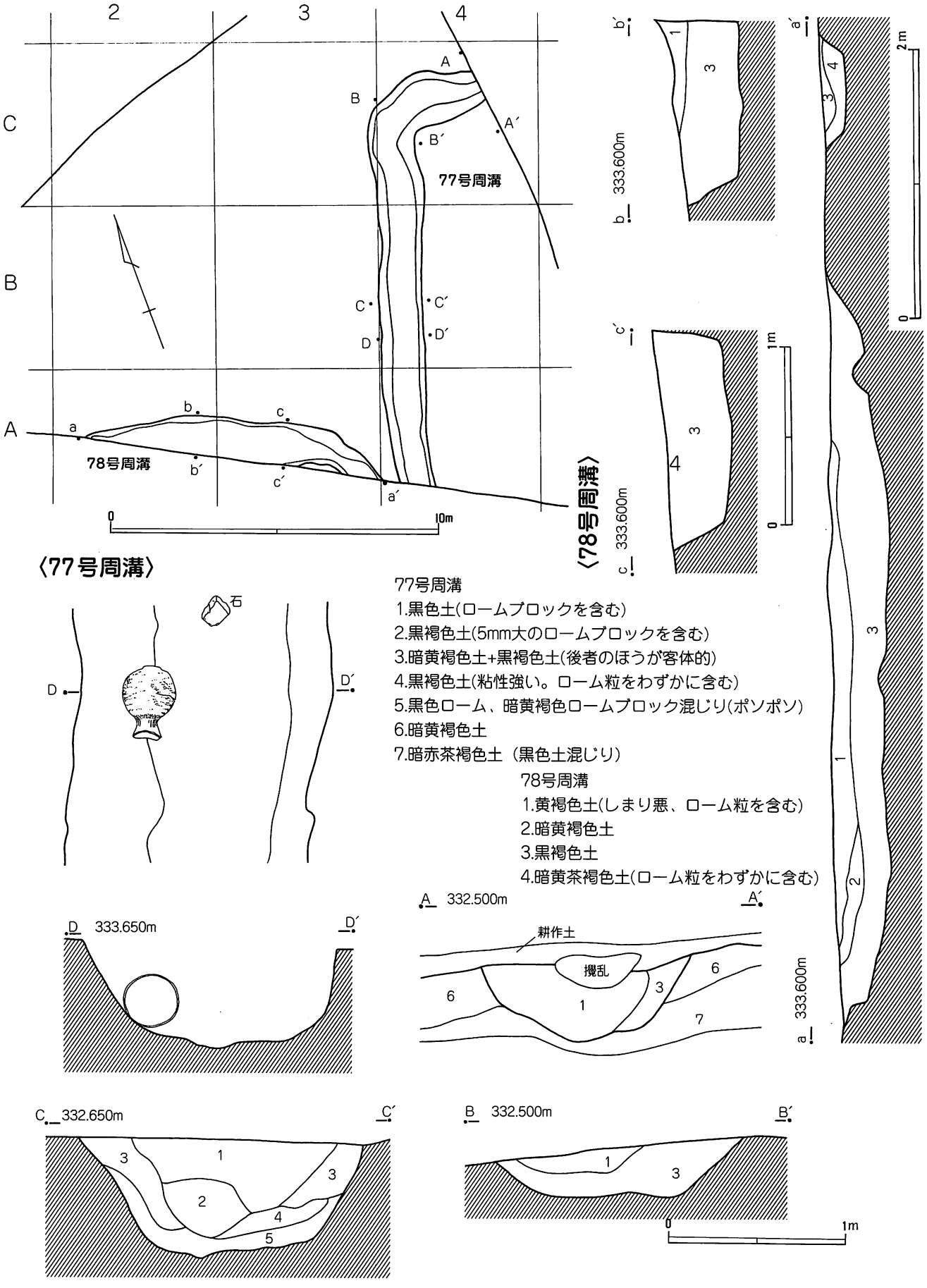
出土遺物　西辺溝の中央付近から口縁部を欠損するだけのほぼ完形の壷が出土した（第12図、写真図版2）。壷は横位で口縁を南に向ける格好で、西壁に沿うように埋置されていた。溝の底面からは10cmほど浮いている。肩部に縄文帯をもうけ、結節縄文が2段に施される。

その縄文帯のほぼ中央に、結節縄文に添うようにして円形浮文を貼付している。胴部が球形を呈することから古墳時代初頭に位置付けられよう。

200m²という小さな調査区でありながらも、2基の方形周溝墓の調査を行なうことができました。この溝に入っている土は真っ黒で、掘って出てくるのは縄文土器の破片ばかり。「本当に方形周溝墓なのか？」と疑心暗鬼になりかけたところに出てきたのが第77号方形周溝墓の壷で、みんなで沸き上がり記念撮影までしてしまいました（写真図版1）。この壷は溝の底から若干浮いた状態で出土していることからこの周溝墓が掘り上がった直後ではなく、しばらく経って溝に少し土がたまりかけた頃に供えられたものと考えられます。このように、お墓に供えられる土器はどこか一部がわざと壊されていることが多く、その部位は胴部だったり、底部だったり、ここに挙げたように口縁部だったりします。これは日ごろの生活で使う‘土器’の日常性を奪う行為と考えられ、一部を意図的に壊された‘土器’は‘仮器’となって非日常的な場面で使われたのです。



第12図　第77号方形周溝墓出土土器



第13図　第77・78号方形周溝墓平面図・セクション・遺物出土状況

第78号方形周溝墓（第13図）

位　　置　A－2・3グリッド。調査区の関係上、北辺溝の一部についてのみ調査。

形状・規模　溝の深さ31～50cm。調査区外におよぶため全体を把握することはできない。現存する北東コーナーはブリッジをもたない。

2. 土坑

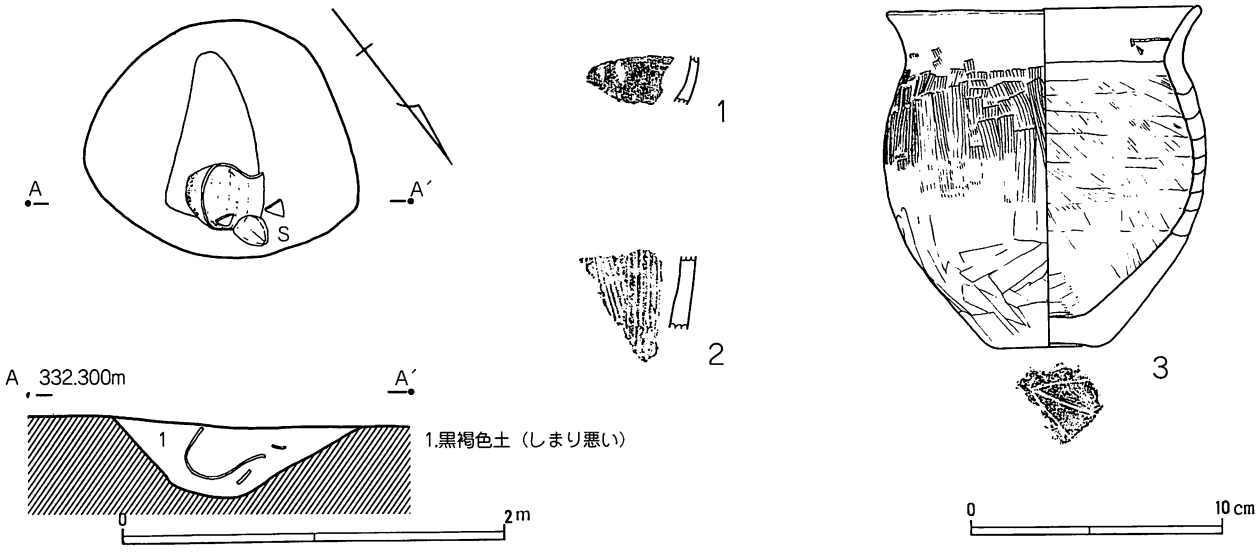
第3号土坑（第14図、写真図版2）

位　　置　C－2グリッド

形状・規模　円形。長軸80cm、短軸60cm、深さ約17cm。中から小形甕が口縁を上にした状態で出土している。

出土遺物（第14図、写真図版3）

1は坏の破片、2は甕の破片である。3は小形甕で内面には輪積みの痕跡が明確に残る。外面は体部上位にタテ方向のゆるいハケ、中位から下位にかけては不整方向のケズリ痕が残る。底面には木葉痕がみられる。古墳時代後期に位置づけられる。



第14図　第3号土坑　遺物出土状況・セクション・出土土器

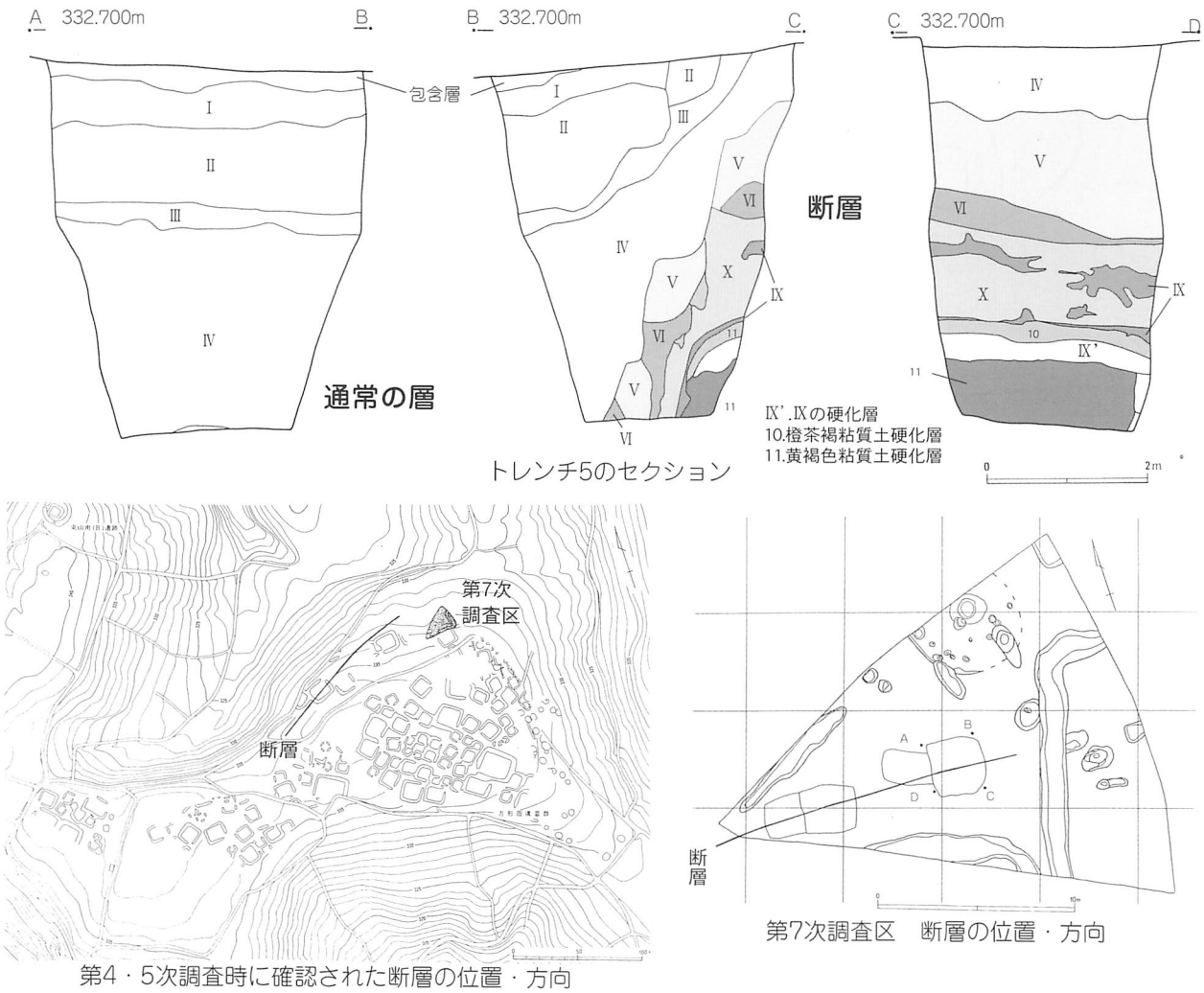
土坑って？

‘土坑(どこう)’とは、地面に掘られた穴の総称です。それらの穴は何に使われていたのでしょうか？その例として考えられるものには、お墓・ゴミ穴・貯蔵穴・蒸し焼きなどの料理に使った穴などがあります。上の平遺跡の土坑を見てみると、穴のなかに残された痕跡がきわめて少ないことから、それらがどのように使われていたのかは残念ながらよくはわかりません。たとえば第1号集石土坑の場合、穴の中にはたくさんの礫、石器などとともに多量の焼けた土や、炭化物が入っていました。今回、この土坑がお墓として使われたのでは？と考え、自然科学分析を行ないましたが、何らかの動物遺体が入れられたというはっきりとした証拠は得られませんでした。

第4節　その他の遺構

このほかにも興味深いものが見つかっているので、ここで紹介しましょう。

この調査区内には現代のゴミ穴が4つもあるお陰で、狭い面積がますます狭くなってしまっている訳ですが、このゴミ穴のお陰でわかったこともありました。この一帯が地質的に不安定な所であることは第1章ー第1節で述べたとおりですが、このゴミ穴の壁に断層の跡が現われたのです。この断層は、直上にＡＴをもつ第３層の少し上あたりでずれていることがわかりますが、方形周溝墓の溝にはズレがみられないことから、この断層が生じたのはＡＴの年代ー約2万年前ーよりも新しく、周溝がつくられる以前だということがわかります。このように地層が変わっている痕跡は第4・5次調査の時にも指摘されています（第15図）。第4・5次調査時のものと第７次調査で発見されたものとでは、その方向が一致してはいませんが、このことによってこの一帯にはかつて細かい層のズレが起こっていた可能性が考えられます。この断層とＡＴの自然科学的な分析は第4章に載せてあります。



第15図　断層のセクション・位置・方向

第5節　遺構以外から出土した遺物

この調査では住居跡や土坑などの遺構以外から見つかった遺物も多くありました。それらのうちの多くは‘包含層’（ほうがんそう）と呼ばれる、遺構の上を覆っている土のなかから見つかっていますが、明らかに弥生時代終末から古墳時代初頭という時期の遺構である方形周溝墓の溝の中からでてきた、縄文時代の遺物についてもそこに流れ込んだものとみなして、この節に載せてあります。

第16図1～5は石鏃で3は剥離が粗いため製作途中のものと考えられる。4・5は有茎石鏃である。いずれも黒耀石製である。

第17図1～2は土偶、3は玦状耳飾、4は土鈴、5～7は土製円盤、8は鉄製釘である。

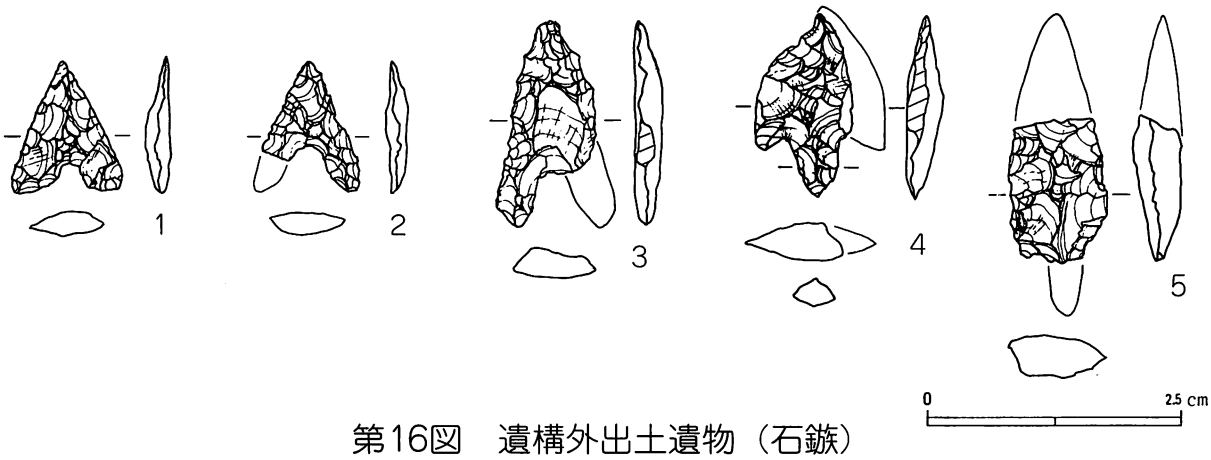
1は河童形土偶で正面に目・口の、側面・背面には沈線による髪の毛の表現、頭頂部には刺突による髪の毛の表現がみられる。また、頭頂部から背面側にかけて穿孔がみられる。2は正面に眉・目・鼻と、顔面と頭部とを区切る沈線がみられる。背面は剥離している。3の玦状耳飾は全体的にぽってりとしたつくりで断面形が肉厚となっている。全体的に朱が塗られている。8の鉄釘は断面が四角形となっている。

9～25はすべて縄文時代の土器である。9は前期末葉、10～13は中期初頭の五領ヶ台式で11は浅鉢である。14は中期前葉の新道式、15～19は同じく藤内式、20～23は中期中葉の井戸尻式、24・25は中期後葉の曽利式である。

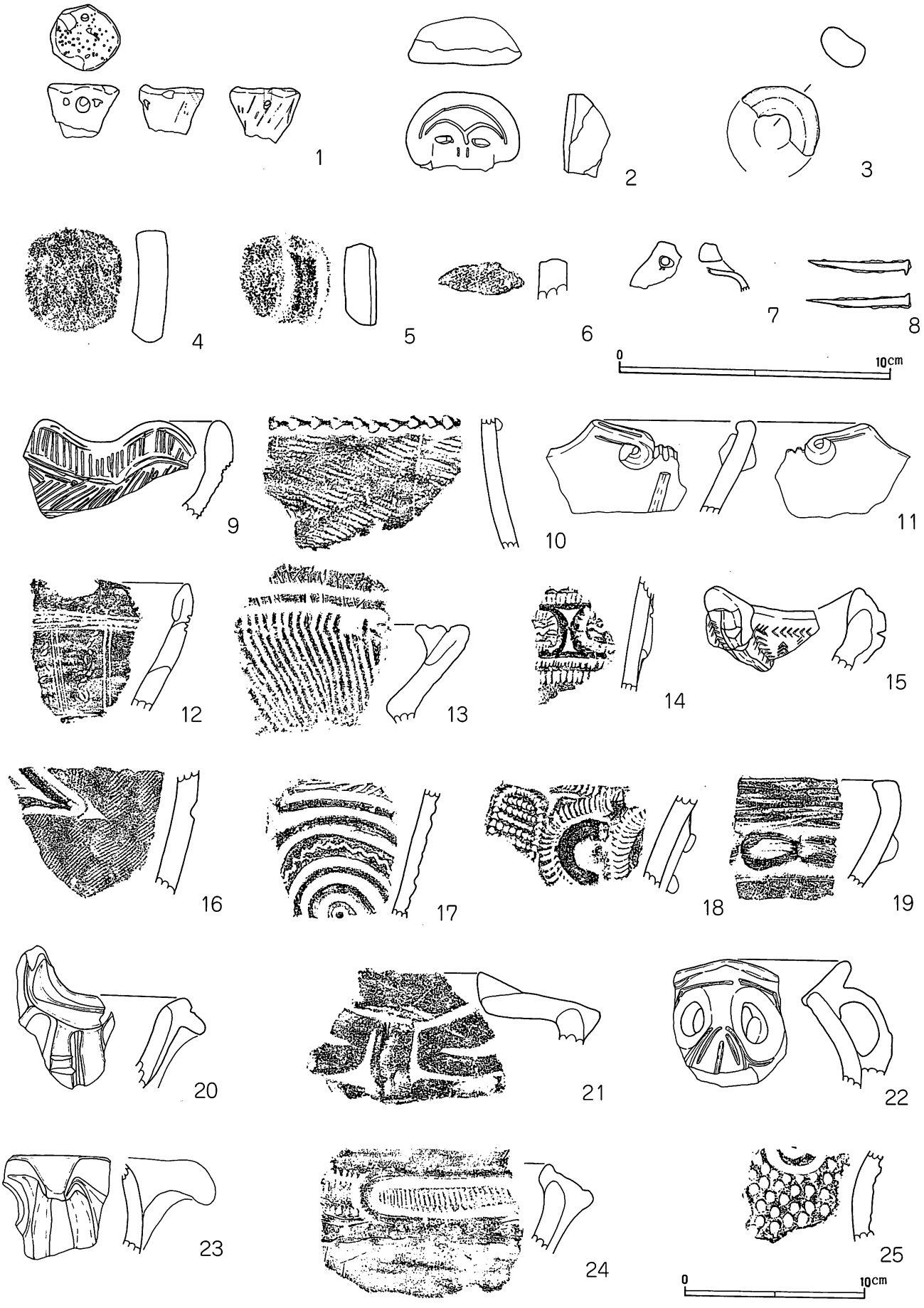
第18図1～4は凹石で1・4は磨石としても使われている。5は磨石、6は石皿、7～9は打製石斧である。

石器について・・・

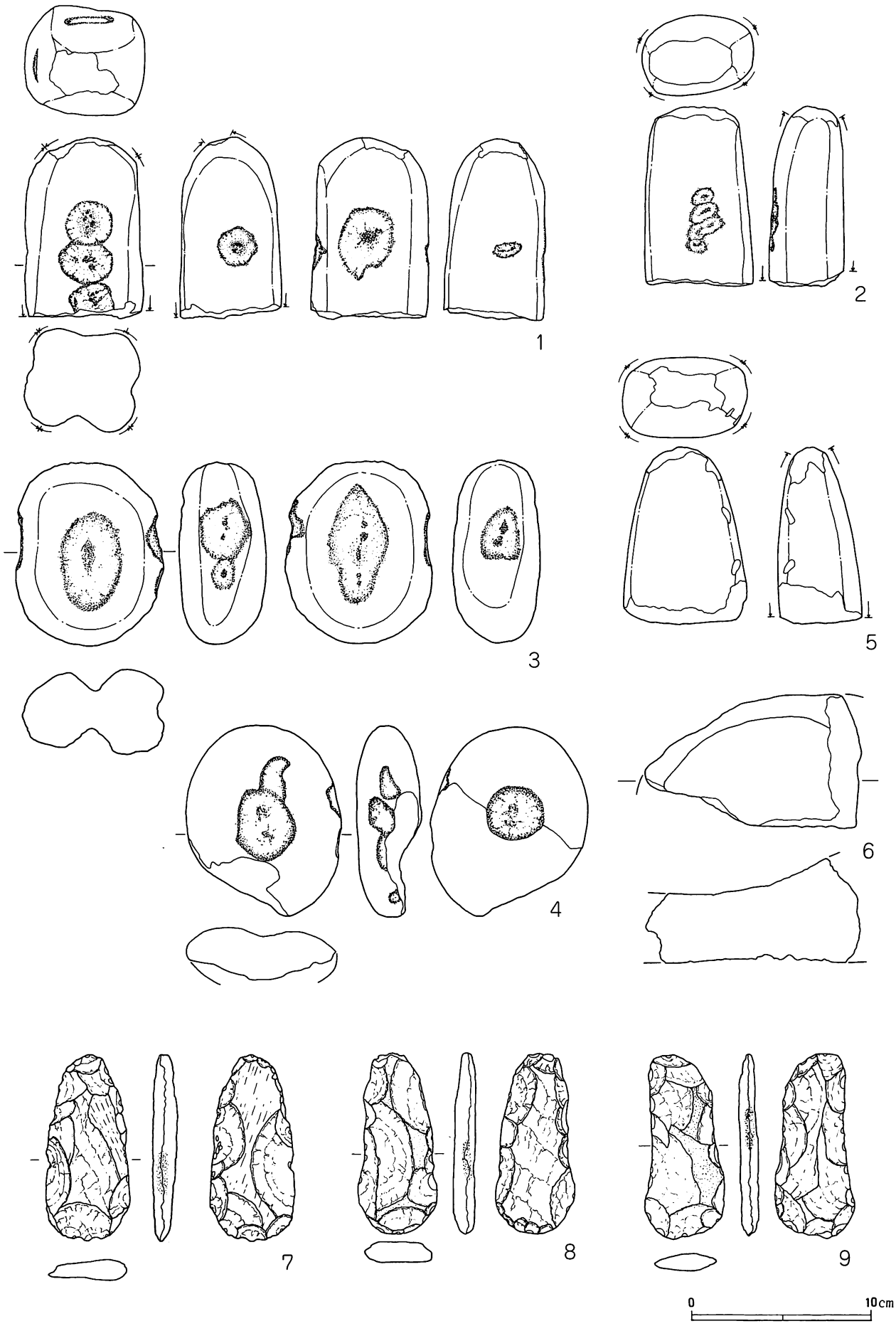
ここでは、くぼみ石・すり石・石皿・打製石斧が挙げられています。それらについて使用方法を説明しておきましょう。まずくぼみ石は、凹んだ部分に木の実などを置き、たたき石でたたいて割るのに使われました。すり石と石皿はセットで木の実などをすりつぶすのに使われていたようです。打製石斧は‘石の斧’と書きますが木を切り倒すための斧としてというよりは、木の棒にくくりつけて土掘り棒として使っていました。



第16図　遺構外出土遺物（石鏃）



第17図　遺構外出土遺物2（土製品・鉄製品・土器）



第18図　遺構外出土遺物3（石器）

第４章　自然科学分析

第１節　第１号集石土坑の自然科学調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上の平遺跡は標高約340ｍを測る曽根丘陵上に立地する。今回の発掘調査では、旧石器時代、縄文時代、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物が検出されている。このうち、縄文時代前期の遺物を包含する集石土坑は、年代観や機能・用途に関する情報が不足していた。そこで、本遺構の構築年代や用途に関する情報を得るために自然科学分析調査を実施する。年代観については遺構内から出土した炭化材について放射性炭素（14C）年代測定を実施し、あわせて樹種同定も行う。土坑の機能・用途については、特にヒトを含む動物遺体の痕跡の有無を確認するために、動物体に多く含まれるリン酸含量を測定するリン分析を実施する。

1. 試料

集石土坑は、内部が炭化物や焼土を含む土壌で埋積されている。土質および包含物の状態から、上位より1層～14層に区分されている。多数の石が置かれ、縄文時代前期後半を示す土器片が出土している。

放射性炭素年代測定と炭化材同定用の試料は、出土した炭化材である。なお、炭化材同定に用いた試料は接合関係の無い2片である。また、リン分析試料は土坑底部から覆土にかけての4点（1・2・4・8層）、および対照試料とした土坑外の土壌1点の合計5点である。

2. 結果

(1) 放射性炭素年代測定結果を表１に示す。

表1　集石土抗出土炭化材の放射素炭性年代測定値

出土遺構	試料の性状	δ13C（同位体効果）	年代値	測定番号（Lab. -No）
集石土抗	炭化材	-26.4‰	4.730±100 y.B.P.	Gak-20217

1) 年代値は、1950年とした年数
2) 年代値は、同位体効果の補正を行った値
3) 放射性炭素の半減期は、LIBBYの5,570年を使用した

(2) 炭化材同定

炭化材は、オニグルミとクリに同定された。解剖学的特徴などを以下に記す。

・オニグルミ（Juglans mandshurica Maxim.subsp. sieboldiana (Maxim.) Kitamura）

クルミ科クルミ属

散孔材で、大径の道管が単独または2～4個が複合して散在し、年輪界付近でやや急に管径を減少させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列する。放射組織は同性～異性III型、1～4細胞幅、1～40細胞高。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　　ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は3～4列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

(3) リン分析

結果を表2に示す。

表2　集石土抗のリン分析表

試料名	土性	土色	P205（mg/g）
土層1	CL	10YR2/1　黒	3.49
土層2	CL	10YR2/1.5　黒～黒褐	3.50
土層4	CL	10YR2/2　黒褐	3.53
土層8	CL	10YR3/1　黒褐	2.68
外の土	CL	10YR3/2　黒褐	5.36

土色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修、1967）
土性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編、1984）の野外土性
CL：埴壌土（粘土15～25％、シルト20～45％、砂3～65％）

試料は、いずれも土性が埴壌土に区分される。土色は黒～黒褐色を呈し、土層１でやや黒色味が強く、下位の土層ほど淡くなる傾向が見られる。なお、対照試料は黒褐色であり、今回の試料の中で最も黒色味が弱い。

リン酸含量は、土層1・2・4で3.5P^2O^5mg/g前後であり、土層8は2.68P^2O^5mg/gと、やや低い。なお、対照試料は今回の試料の中で最も高く、5.36P^2O^5mg/gである。

3. 考察

(1) 集石土坑の年代

集石土坑から出土した炭化材は約4,730年前の値を示した。本遺構からは縄文時代前期後半の土器片が出土している。今回の測定値は縄文時代中期の年代観（5,000～4,000年前：春成，1992）に相当するものであり、出土土器から推定される年代観よりも若い値となっている。炭化材が遺構に伴うものであるとすれば、本遺構は縄文時代中期以降に構築されたことになる。この点については、炭化材の出土状態や上位層の堆積状況も含めて再検討したい。

(2) 炭化材の樹種

出土した炭化材は、燃料材などの一部が残存したものと考えられる。樹種は、オニグルミとクリであり、これらが燃料材として利用されていたことがうかがえる。このうち、クリは縄文時代の住居構築材や燃料材などによく利用されている（千野，1983）。山梨県内では、白州町上北田遺跡や高根町社口遺跡などで報告例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993；植田，1997）。

また、クリとオニグルミは共に子葉が可食であり、縄文時代の重要な植物食糧であったことが指摘されている（粉川，1983）。とくにクリは、食糧を安定して確保するために栽培されていたことが明らかとなっている（辻，1997；佐藤，1997）。クリは、9年生～10年生以後から20年生前後の樹齢が成果期であり、一般に20年生以後は年毎に収量が減少する（志村，1984）。このことから、収量の落ちた老木を伐採して用材としていたことが推定される。燃料材は、このような伐採した木材の枝や加工時の余材などが利用された可能性がある。

しかし、本遺跡および周辺地域でクリが栽培されていたか否かについては不明な点が多く、今後さらに資料を蓄積したい。

(3) 動物遺体の有無について

集積土坑覆土の対照試料である土坑外の土壌は著しく高いリン酸含量を示した。これは何らかの人為的影響を受けた可能性が高いと推定される。集石土坑の上に耕作土が認められたことから、施肥などの影響を受けている可能性がある。ところで、土壌中に普通に含まれるリン酸含量、いわゆる天然賦存量はこれまでの報告例からその上限が5.5P^2O^5mg/g程度と考えられる（Bowen，1983；Bolt・Bruggenwert，1980；川崎ほか，1991；天野ほか，1991）。今回の結果ではリン酸含量が集石土坑の土層1・2・4で3.5P^2O^5mg/g程度であり、天然賦存量を大きく上まわる値ではなかった。また、8層については天然賦存量を下回る傾向にあった。土層1・2・4は土層8と比べてやや高いリン酸含量であったが、これは土層中に含まれる腐植物質、つまり植物遺体の供給量の差に由来する可能性がある。腐植を供給する植物体にもリン酸成分が含まれており、腐植含量の高い土壌中にはリン酸成分も多い傾向がある。なお、土層試料中には炭化物や焼土粒子、あるいはローム粒などが確認されたが、その量比とリン酸含量には相関関係が認められず、影響は極めて低いと予想される。

以上のことから、集石土坑の覆土試料には、動物遺体に由来するリン酸成分が濃集している可能性は低いと判断される。ただし、上記した年代測定値などから、時間経過とともにリン酸成分が溶脱している可能性も否めない。今後、同時期の遺構埋積物についてもリン分析も実施し、比較検討することで今回の結果を再評価したいと考える。

引用文献

天野洋司・太田　健・草場　敬・中井　信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.28-36.

Bolt,G.H.・Bruggenwert,M.G.M.（1980）土壌の化学．岩田進午・三輪睿太郎・井上隆弘・陽捷行訳，学会出版センター［Bolt,G.H. and Bruggenwert,M.G.M.(1976)SOIL CHEMISTRY］,p.235-236.

Bowen,H.J.M.（1983）環境無機化学 ー元素の循環と生化学ー．浅見輝男・茅野充男訳，297p.，博友社［Bowen,H.J.M.（1979）Environmental Cemistry of Elements］.

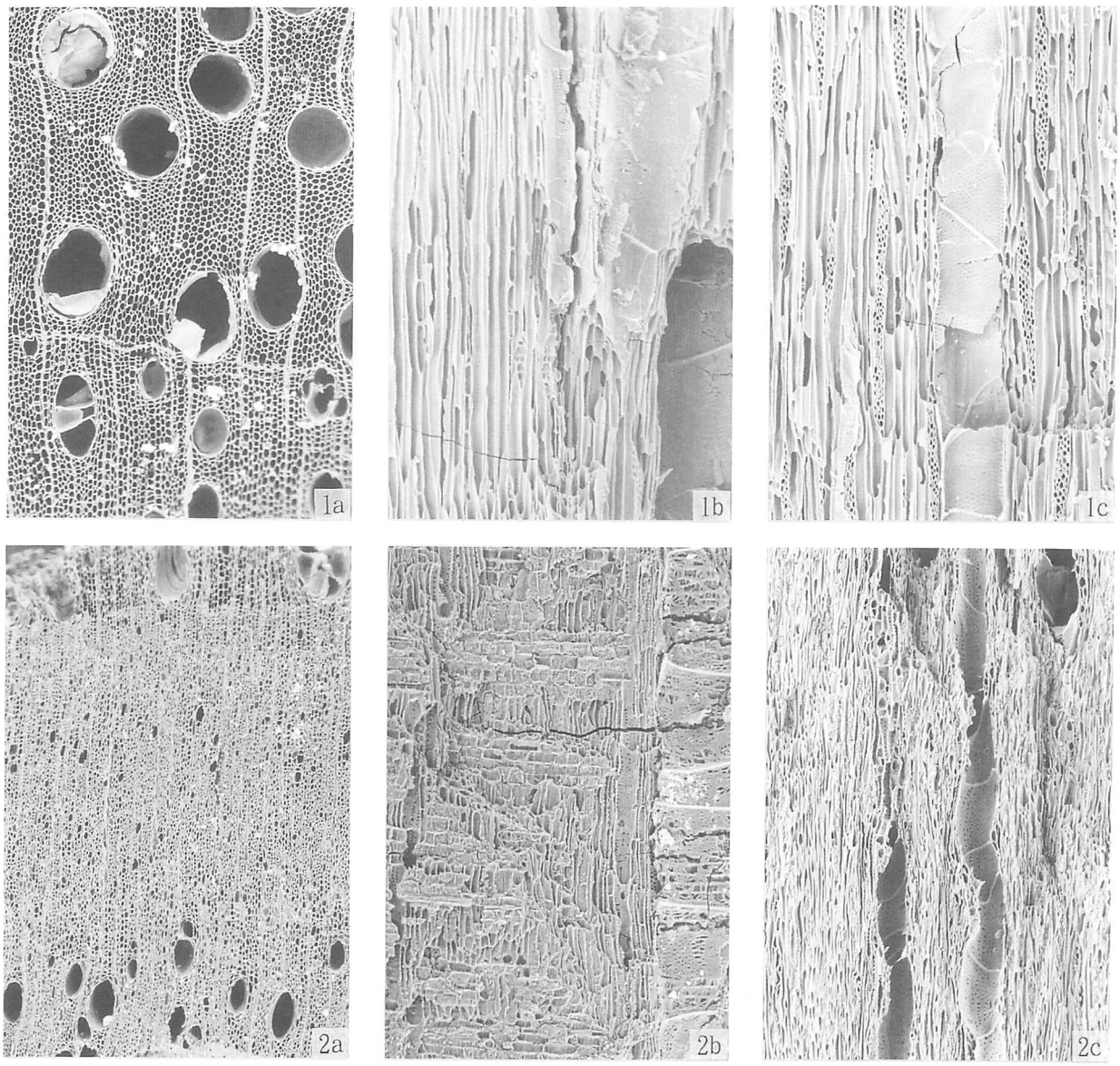
千野裕道（1983）縄文時代のクリと集落周辺植生　ー南関東地方を中心にー．東京都埋蔵文化財センター研究論集，Ⅱ，p.25-42.

土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法．354p.，博友社.

土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法．440p.，養賢堂.

春成秀爾（1992）縄文時代　時代概説．日本第四紀学会・小野　昭・春成秀爾・小田静夫編集「図解・日本の人類遺跡」，p.51，東京大学出版会．
川崎　弘・吉田　澪・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量．農林水産省　農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」，p.23-27．
粉川昭平（1983）縄文人の主な植物食糧．加藤晋平・小林達雄・藤本　強編「縄文文化の研究2　生業」，　p.42-49，雄山閣．
京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第1巻．411p.，産業図書．
農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖．
パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）上北田遺跡から出土した端家財および炭化種子の同定．「山梨県北巨摩郡白州町上北田遺跡　県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，　p.1-5，白州町教育委員会・峡北土地改良事務所．
ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定．ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」，p.39-40．
佐藤洋一郎（1997）ＤＮＡ分析でよむクリ栽培．岡田康博・NHK青森放送局編「縄文都市を掘る　三内丸山から原日本が見える」，p.63-173，NHK出版．
志村　勲（1984）クリの生育特性．「農業技術体系　果樹編5　クリ基礎編」，p.11-16，社団法人農山漁村文化協会．
辻　誠一郎（1997）三内丸山を支えた生態系．岡田康博・NHK青森放送局編「縄文都市を掘る三内丸山から原日本が見える」，p.174-188，NHK出版．
植田弥生（1997）社口遺跡から出土した炭化材の樹種．「社口遺跡第3次調査報告書」，p.194-198，山梨県北巨摩郡高根町教育委員会・社口遺跡発掘調査団．

図版１　炭化材



1. オニグルミ（集石土坑）
2. クリ（集石土坑）
　a：木口，b：柾目，c：板目

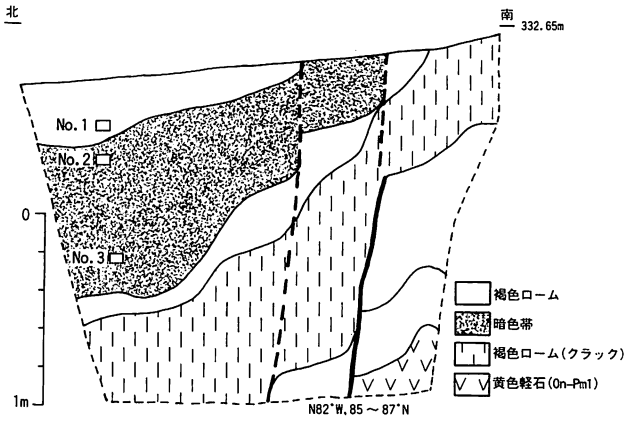
200μm：a
200μm：b, c

第2節　上の平遺跡の断層とその層位

河西　学（山梨文化財研究所）

曽根丘陵東山に位置する上の平遺跡での今回の発掘地点は、東山の最高位面と下位面間の北傾斜斜面に位置する。1号・2号トレンチでは、N80°E、78°Nの正断層が存在し、甲府盆地側(北側)の地層が約70cmの落差をもって変位している。5号トレンチにおいて同一の正断層は、N82°W、85～87°Nの走向傾斜を示し、北側の地層が80cmの落差をもって変位している断層と、さらに北側に同様の落差約25cmを示す断層とが認められ、変位の合計は約105cmである(第1図)。

第5トレンチ断面では、最下層に約10(～8)万年前御岳第一軽石Ｏｎ－Ｐｍ1が、その上位に硬質ローム層、黒褐色の暗色帯、ソフトローム層が重なる。さらに縄文包含層(縄文前期後半～中期後半)がこれらを覆う。層位を確認するために暗褐色ソフトローム層から1点、黒褐色の暗色帯から2点の試料を採集して、河西(1997)と同様の方法でテフラ分析を行った。



第1図　5号トレンチ断面図

その結果Nos.1,2に約2.5(～2.2)万年前に噴出した姶良Ｔｎテフラ(ＡＴ)に由来する泡壁(バブルウォール)型無色火山ガラスが検出された(第1・2表、第2図)。曽根丘陵上で従来報告されている上の平遺跡・上野原遺跡・立石遺跡の分析結果と比較すると、黒褐色の暗色帯は、ＡＴ直下の武蔵野台地立川第2暗色帯に対比される可能性が高い(河西,1990)。立川ローム層第2暗色帯に対比される曽根丘陵の暗色帯は、上の平遺跡で厚さ約35cm、上野原遺跡で厚さ約35cm、立石遺跡で厚さ約33cmを示す。これらに比較して第5トレンチの暗色帯は、北側の断層付近では約50cm、さらに北側では最大で約90cmと極めて厚い。暗色帯の厚い堆積の原因として次の2点が考えられる。一つは、斜面下部という地形的特徴により台地平坦面より堆積速度が高かった可能性、他方は、暗色帯が層厚を増加する部分付近に地層の変位が推定される可能性があることと関連性があるかもしれない。

断層の活動時期は、厳密には上位の地層が保存されていないので明確ではないが、ＡＴ堆積以降であることは確実である。縄文包含層の分布は断層付近を境に北側には分布しているが、南側では分布していないとされる。また断層北側での縄文包含層の分布は断層に向かって漸減している。縄文遺物包含層の分布の特徴が断層変位によるものなのか、縄文時代以降の人為的あるいは自然の削平作用によるものなのか現状では確認できない。ただし古墳時代初期に築造された方形周溝墓には断層による変位が認められないことから、少なくとも古墳時代より前に活動した断層であることが推定される。

本遺跡第5次発掘調査81号方形周溝墓を構成する地山部分において、北東－南西方向の線を境に異なる地層が接していることが確認されている(末木健氏談)。本地点と近接し地形的にも類似していることから、斜面地形に沿って南北性の正断層が連続している可能性がある。米倉山Ｂ遺跡の断層あるいは佐久活断層(曽根丘陵団体研究グループ,1991)などとの関連性も今後注目したい。

文献

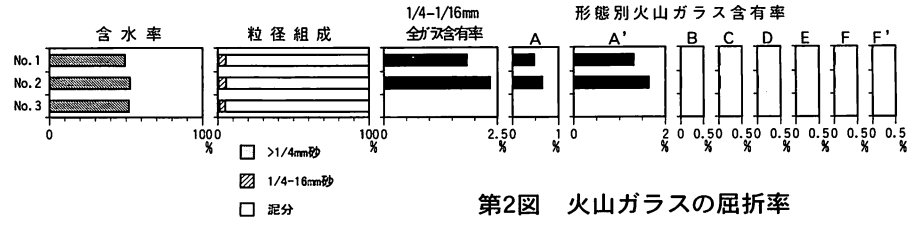
河西学(1990)立石遺跡での先土器遺物を包含する地層。山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター研究紀要、6、47-58。
河西学(1997)向河原遺跡のテフラ。『向河原遺跡』、山梨県埋蔵文化財センター調査報告、第129集、29-31。
曽根丘陵研究グループ(1991)甲府盆地南縁に見られる活断層に関する新事実。地球科学、45、3、217-221。

第1表　火山ガラスの計数

	No.1	No.2	No.3
A　無色	49	66	
A'　無色	136	167	
B　無色	1	1	
C　無色	2	2	
D　無色		1	
E　無色			
F　無色	2	1	
F'　無色			
その他	310	262	500
合計	500	500	500

第2表　火山ガラスの屈折率測定値

試料番号	火山ガラスの形態	色調	屈折率（モード）	対比されるテフラ
No.2	泡壁型(A・A'型)	無色	1.498-1.501(1.4995)	姶良Ｔｎテフラ　ＡＴ



第2図　火山ガラスの屈折率

第5章　まとめ

上の平遺跡は甲斐風土記の丘のなかにあります。この風土記の丘は銚子塚古墳、大丸山古墳、茶塚古墳など数多くの古墳が密集する地帯でこの一帯を保存し、遺跡公園として一般の人々にも古い時代に親しんでもらおう、という目的でつくられたものです。ここは、遠足やあるいはピクニックなどで訪れたことのある方々も多いかもしれませんね。天気のよい日などは、本当に気持ちのいいところです。今回の発掘調査はちょうど気候のよい4～5月にかけて行われたことから、調査スタッフもこの遺跡公園を十分に満喫することができました。こんな遺跡公園を整備していくための工事を行なう、その前段階としてこれまでの7次にわたる上の平遺跡の発掘調査は行なわれてきたのです。その結果、この一帯は上にあげたような前方後円墳という古墳時代前期（1700年くらい前）ころに近畿地方から伝わったお墓だけではなく、方形周溝墓というそれ以前からこの地域でつくられていたお墓もたくさん集まっていることがわかりました。また、今までの調査からも長野県や東海地方、北陸地方など様々な地域からもたらされた土器もみつかっています。ということは、この場所がいろいろな地域にゆかりを持った大小様々な権力者たちの墓地だったとも言えるでしょう。このように力をもった人々のお墓はそこに遺体を埋めたらおわり。というものではなく、何度にもわたってそのお墓で‘おまつり’が行なわれていたようです。今回の調査で発見された、方形周溝墓の周溝部分から発見された壷も、この溝が少し埋まりかけた頃ここに置かれた状況を示していることから、埋葬直後ではなく、今で言う‘3回忌’などといった法要にあたるような儀式の際に使われたものなのでしょう。

縄文時代ではこの一帯は中期初頭を中心とする大きな集落であったことが想定されていますが、多くの土偶や玦状耳飾などが見つかっていることや「の」字状垂飾などの特殊な遺物が出土していることから特別な性格を持った集団であったことが考えられます。土偶に注目してみると中期初頭から出現する‘河童形土偶’のうちの特徴的な一形態（第17図）がみられる地域であることにも、その特殊性をうかがうことができます。今回の調査でもこのタイプの土偶が見つかっています。

また、この一帯が地質的に不安定な場所であることは地学的な立場からは言われていたことですが、これまでの調査でも地層のズレ、断層と考えられるような痕跡が発見されていますし、今回の調査でも断層の位置と方向を確認することができました。

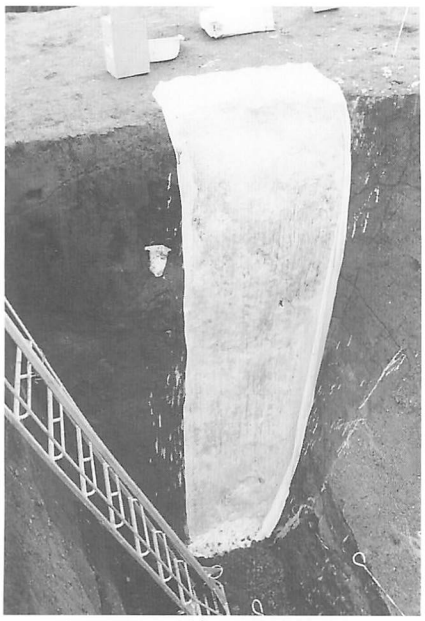
このようにこの一帯の遺跡を保存し展示する遺跡公園内からもこれだけたくさんのことがわかっています。もしみなさんが、これから「甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園」に出掛ける機会があったら、野外展示されている方形周溝墓をみることはもちろんですが、一度この高台にたって古い昔の時代に思いを馳せてみて下さい。きっと展示を見る以上にそれらの時代を身近に感じることができるのではないでしょうか？　この報告書がその手助けとなれば幸いです。

写　真　図　版

調査区全景

季節は初夏。
調査区はわきのとうもろこしも
すくすく成長しています。

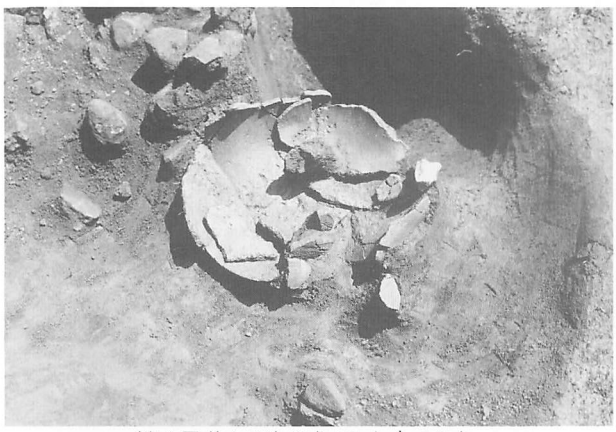
出土した壷とともにみんなで。
壷はどこにあるやら…



断層をはぎとる作業です。

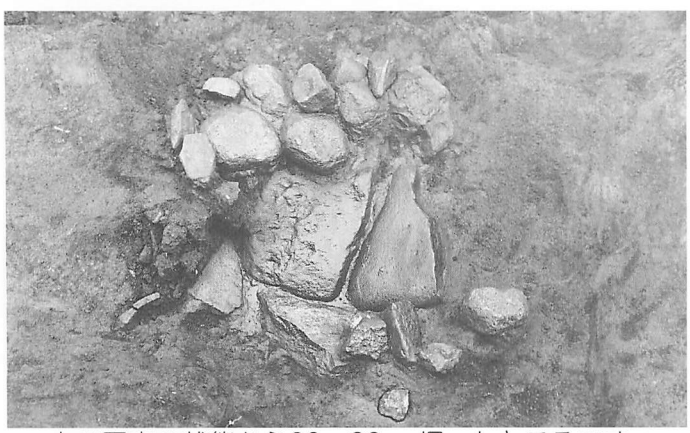
写真をとるため住居跡をおそうじ中。

第1号住居跡を完全に掘ったところ



第1号住居跡の炉のあとです。

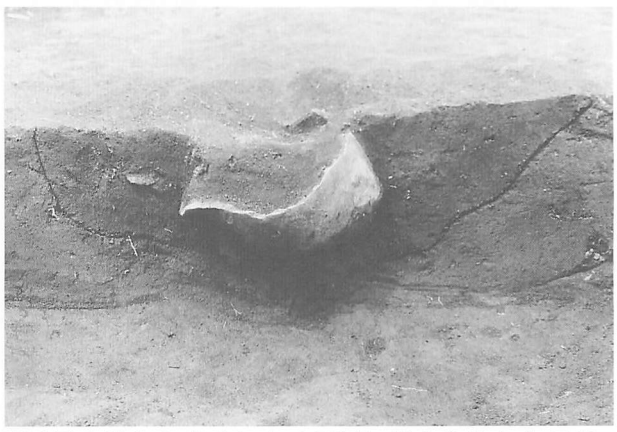
第1号集石土坑の上に置いてある石群



上の写真の状態から20～30cm掘ったところです。

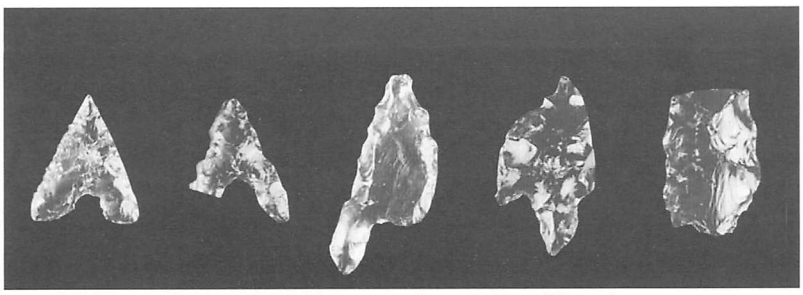
第77号方形周溝墓から壷が出土した様子

（ちょうど、壷の底の位置を境にして、断層によって土色、土質がはっきりわかれていました。）



第3号土坑から出土した小形甕。横からみたところ。

断層が起った位置を境に、土色が全くちがいます。

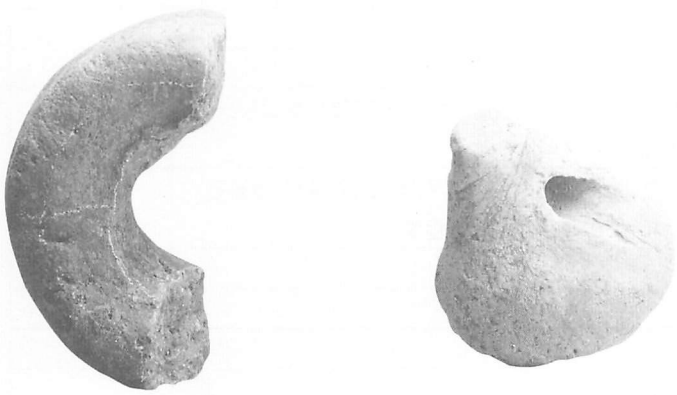


出土した石鏃各種。全て黒耀石製です。

第1号住居跡の炉に使われた土器

左は「河童形」とよばれる土偶、右は縄文時代中期の土偶

第77号方形周溝墓から出土した壷



左は耳かざり。全面に朱がぬってあります。右は土鈴？

第3号土坑出土の小形の甕（かめ）

第1号集石土坑から出土した石器。何種類あるかな？

報告書抄録

ふりがな	うえのだいらいせき　だい7じはっくつちょうさほうこくしょ
書　名	うえのだいら　ー上の平遺跡第7次発掘調査報告書ー
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書173集
著者名	野代恵子
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-1508　山梨県東八代郡中道町下曽根923　TEL 055-266-3881
印刷所	㈱峡南堂印刷所
発行日	1999年10月31日

上の平遺跡第7次調査概要

ふりがな	うえのだいらいせき　だい7じちょうさ
所在地	山梨県東八代郡中道町大字下向山字上の平1135 25,000分の1地形図　甲府 位置　東経138度35分25秒　北緯35度35分7秒　標高333m 市町村コード19326
調査原因	風土記の丘整備事業（有価物分別施設の設置）に伴う事前調査
調査期間	1998年4月20日～6月29日
調査面積	200m^2
縄文時代	
種　別	集落
主な遺構	集石土坑1基（前期後半〔諸磯b式〕）、住居跡1軒（中期後半〔曽利Ⅲ式〕）、 土坑6基（前期後半〔諸磯b式〕ほか）
主な遺物	土器（前期後半〔諸磯b式〕～中期後半〔曽利Ⅴ式〕）、石器（凹石、磨石、多孔石） 土偶、土製品など、コンテナ〔46×30×26cm〕10箱程度
特記事項	
弥生時代・古墳時代	
種　別	墓
主な遺構	方形周溝墓2基、土坑6基（古墳時代後期ほか）
主な遺物	土器（壷、小形甕）、土鈴?など　コンテナ〔46×30×26cm〕2箱程度
特記事項	
時期不明	
特記事項	断層の痕跡が確認された。

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第173集

甲斐風土器の丘・曽根丘陵公園

うえのだいら－上の平遺跡第7次調査－

発　行　1999年10月31日

編　集　山梨県埋蔵文化センター

山梨県東八代郡中道町下曽根923

TEL　055-266-3016　FAX 055-266-3882

印　刷　株式会社峡南堂印刷所

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集

うえのたいら上の平遺跡第7次発掘調査報告書

1999.10.

山梨県教育委員会